

上原三川(七)

——日本俳句運動の地方への伝播の状況——
VII

宮坂敏夫

- 一、日本派俳句との出会い
 - 二、月次十句集における三川
 - 三、「新俳句」編輯の内情
 - 四、旧派との論争
 - 五、教育者としての一面
 - 六、新題昆虫俳句
 - 七、松声会小史——「はゝき木」を中心に
 - 八、信濃十句集
 - 九、糸瓜忌論争——選者としての三川
 - 十、三川俳句論——編年体三川句集
 - 十一、三川年譜考
- (以上一号)
(二号)
(三号)
(以上四号)
(五号)
(六号)
(本号)

十一、三川年譜考

凡例

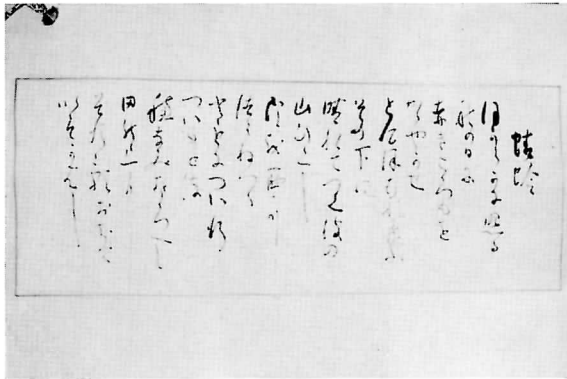
一、本年譜は三川上原良三郎の生誕の年慶応二年(一八六六)から死去の年明治四〇年(一九〇七)までを主として記載した。ただ

- し、追悼会や作品集の出版、懷德碑の建立など死後の三川に関する事項も年代順に掲げた。
- 一、年代は年号の次に西暦を()内に示した。年齢は数え齢で掲げてある。
- 一、俳人となつて三川の号を用いる以前は本名の良三郎を使い、以後は三川を用いて記述した。
- 一、〇印は三川良三郎に直接かわる事項であり、▽印は関連事項として後に掲げた。また注として、参考事項を各年代の終りに一段落して掲げた。
- 一、参考に掲げた家系図、川船家に関しては、川船秀人氏の助力を得たものである。

慶応二年(一八六六) 一歳

〇八月八日(陽曆九月一六日)信濃国安曇郡花見村(現長野県南安曇郡梓川村花見)の萩原弥曾次、そふの次男として出生。¹⁾ 本名良三郎。両人の間にはすでに長女もや(嘉永五年(一八五二)生)、次女よし(万延元年(一八六〇)生)、長男君十(文久三年(一八

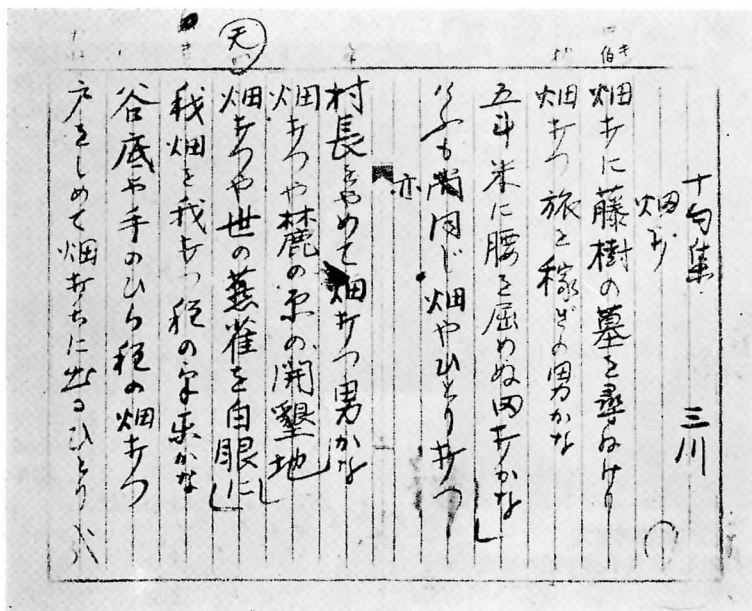
* 信州大学医療技術短期大学部一般教育



三川に書きあたえた子規自筆新体詩
「蜻蛉」（小虫四季）（上原家蔵）



上原三川と河東碧梧桐 明治30
年（1897）4月下旬「新俳句」
の稿を携えて帰郷の際。



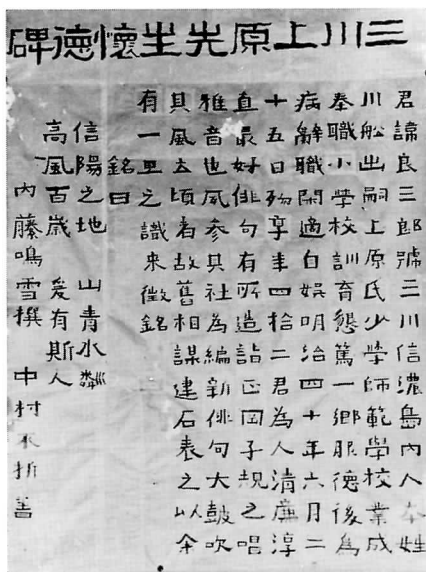
信濃十句集「烟打」10句 三川稿



三川の三人の兄弟
右 三川，中 兄君十，左 弟益一



実父 萩原弥曾次



三川懷德碑原文

明治45年（1912）2月中村不折の揮毫したもの。



担任望月直弥を囲んで。直弥の向
って左が山本一蔵（銅山）。明治36
年度末の高等科卒業写真か。第4
列右から5番目が三川校長。

六三) 七月六日生) があり、後に三男益一(明治五年(一八七二)五月一三日生) がもうけられる。

実父弥曾次は萩原弥九郎長男として文政八年(一八二五) 八月一二日生であつたから当年四二才、実母そふは天保三年(一八三二) 二月二五日生の三五才、いずれも当時としては遅い子であつたといえる。そふは、安曇郡青嶋村(現松本市島内青島) 川船助左衛門門茂三女で、弥曾次と結ばれ入籍したのは、嘉永二年(一八四九) 二月二五日である。戸籍によると、明治元年(一八六八) 正月一日に弥曾次の実弟市郎次が家督を相続している。このことから推測するに、弥曾次は良三郎が三歳のとき、四五才で退隠したことになる。いかなる理由があつたものか確かなことはわからないが、兄君十と良三郎、後に弟益一の男子三人は、実母の実家川船家へ移籍され、以後実母の異父兄相重(愛十とも記す) を父とし、さ江を母とした。姉二人は萩原市郎次の養女となり、花見(現梓川村八百五十三番地) の萩原家に残る。川船家では男子がなかつたので、長男君十を嗣子とした。川船家は累代の手習師匠で、犀頭学舎と号した。⁽⁴⁾

(1) 良三郎は大黒屋(萩原家が青嶋村新橋糸魚川街道筋に新築した家宅。米穀雜貨を商う) にて生れたり。生母の手に育てられたも伯父相重の援助も大に力があつた。但し生活費は或程度まで実父から仕送つてきた。良三郎の性格の真面目で正直誠実なところは相重に似て居た。

(相重三女、河野かつ江談)

(2) 萩原家は花見村庄屋たりしことあり。後松本藩の収納初めの摺屋を

仰付けられて維新に至り、農蚕の傍機業其他の興業に努む。弥曾次初め弥右衛門と称す。父は弥一右衛門、後に弥九郎と改む。生母は川船家より出づ。川柳情歌に堪能なりしが弥曾次及び市郎次兄弟亦俳諧を好み、市郎次の子栄吾現に宗匠たり。弥曾次性潤達洒落、細事に拘泥せざるが如くにして一面小心実直なりしといふ。常に黒縮緬の羽織に銀板に家紋を刻みたるものを縫付けて着用し野袴を穿ち好みて山野に遊べり。頭巾を頂き長髯童顔、笑みを含みて人に対す。梓川の上流稲核に往きて住せることあり、里人呼んで袴隠居と渾名せりといふ。雜貨、米穀、蚕網等一代の商業は概ね失敗を重ねたるものゝ如く、時に人の為に禁厭を行ひて疾苦を除き、或は軍書読をなして人を喜ばしめ亦自ら楽しむ。(胡桃澤勘内「三川上原良三郎先生略歴稿」)

(3) 弥曾次の弟市郎次は萩原家の分家④へ養子に入つたが出され、実家に復していたのを相続人の兄弥曾次が同情し、自分は隠居するからと言つて家督を継がせたという。(市郎次孫、萩原太郎談) 市郎次は明治三〇年(一八九七) 二月二四日に退隠し、長男銚市が相続している。

(4) 川船家は東お師匠様家と言われ、南安曇成相組川船助右衛門益胤より分家し、川船武左衛門を祖とし、助右衛門知治、藤九郎昌尚、仲吉住矩、助左衛門則茂、相重と系譜を持つ家。(川船秀人調査) 成相組大庄屋川船武右衛門の弟藤九郎、志を立てゝ江戸に出で、縁故を以て増上寺の書役となりしが後眼疾の爲、郷土に帰り、分家して明和七年(一七七〇) 寺小屋を創む。仲吉の妻は松本宮渕赤穂定右衛門の女、文政五年(一八二二) 仲吉早世し、相重未だ幼少の故に、文政末年筑摩郡三溝村(現東筑摩郡波田町下三溝) 百瀬重左衛門の二子助左衛門が妻を失ひて在るを入夫に迎へ家業を継がしむ。松本藩木澤天籟に学び能筆の名あり、又親世流の謡曲を善くす。性飄逸にして狂歌地口等に長ぜり。相重を訓育補導して共に精勵善く努め、犀頭学舎の名大に著はる。(胡桃澤勘内「三川上原良三郎先生略歴稿」)

明治七年（一八七四） 九歳

○筑摩県管内第一番中学区第七十八区青島村に青島学校が設立される。村内の阿弥陀堂に仮学校ができ、校長は小口徳⁽¹⁾（字卯一）。父相重、授業生⁽²⁾として教授する。これより前、明治五年（一八七二）に、明治七年（一七七〇）以来一〇三年間の歴史をもつ犀頭学舎が廃止される。兄君十とともに良三郎は青島学校で小口徳の訓育を受ける。正確な入学および卒業年月日、また在学年月は不明。

（1）小口徳は安曇郡細萱（現南安曇郡豊科町細萱）の人で、研成学校出身。研成学校は明治六年（一八七三）五月三〇日高橋敬十郎（号白山）が在勤を命ぜられているので、白山の薫陶を受けた門下生かとも推測される。『実践社業餘』藤森厚（寿平）輯、百瀬重（謙三）校、に漢詩「秋露」を載せる漢詩人でもある。

（2）「学区割につき県達」（明治六年五月）により学校は、「徒ニ従前之弊風ニテ手習師匠杯相唱候様無益之教則ニテハ勿論開学不相成候条此旨深体認シ旧来之弊習ヲ洗除シ学制之御趣意貫徹候様可心掛候」との主旨で開設されたが、相重のような手習師匠が授業生として開講することが多かった。

明治一四年（一八八一） 一六歳

○九月、長野県師範学校松本支校入学。明治一二、三年頃の師範学校は自由民権運動を推進する奨匡社⁽²⁾に加入する者が多く、「我地方ノ自由ハ師範校ノ森林中ヨリ萌生セリ⁽³⁾」といわれていた。良

三郎が入学した一四年は、全国的に自由民権運動がもつとも高揚した年で、前年十一月、東京で開催された国会期成同盟の大会以後、各地で国会開設要求の建白書や請願書が出され、地域政党の結成がすすめられている。しかし、師範在學生や卒業生など教員層の奨匡社への加入者は翌一五年あたりから急激に減少しており⁽⁴⁾、師範学校松本支校内の民権運動熱は学校あげてのマスとしての高揚から個々の活動家単位へと分散していく。良三郎は奨匡社に加入していないが、兄川船君十⁽⁵⁾、高等科同期生倉科斧吉、中等科同期生登内泰之助、小松清十、さらに入学時同期で親交をもつ洞沢諫吉、寄藤好実などは奨匡社員として運動に熱を入っていた。当然、良三郎も影響を蒙ったものと推測される。

○第一期卒業、一五年（一八八二）二月。同期三名。同期生にのちに、東筑摩郡下の小学校校長となる三井弥太郎、洞沢諫吉、寄藤好実らがいる。

○第二期卒業、一五年七月。同期二八名。

（1）明治九年（一八七六）十一月二五日長野県権令橋崎寛直より布達された「本県師範学校教則並に生徒取扱規則」によると、当時師範学校の修業年限は二年であり、それを四期に分け、毎期六か月修了ごとに試験を課し進級させている。筑摩出張所第五課保管の「小学校師範学校卒業生人名簿」には、全科四期修了したはじめての卒業生は、明治一〇年（一八七七）五月に九名、同年六月に五名が記されている。

（2）松本地方の自由民権運動推進の母体となった結社。発端は、明治一二年（一八七九）十一月二〇日夜、上条燈司、市川量造、三上忠貞が南安曇郡東穂高村の松沢求策宅で、「世事ヲ談シ人民結合力ノ緊要ヲ話

シ遂ニ一社ヲ設立スル事ニ決したときにおかれる。結成されたのは、一三年（一八八〇）四月一日。松本の宮村町にあった青竜山全久院に七四五名が参集し、奨匡社を組織した。（上条宏之「地方自由民権運動結社の組織過程とその背景―松本奨匡社の場合」『信濃』第一三巻五号）

（3）奨匡社の中心人物松沢求策が松本の月桂社発行の『月桂新誌』第二四号（明治二年（一八七九）六月二十九日）の論説に掲げた表題。同題で五回にわたり、当時師範学校内での学生運動、寄宿舎の賄方改善要求に対する学生側の主張を支持する論を展開したもの。自由民権思想にかかわって、いかに師範学校の内外との連帯意識が強靱であったかの一つの証左。

（4）師範学校松本支校卒業生の奨匡社への加入者状況をみると、明治一〇年（一八七七）全科（四期）卒業生一四名中二名、一二年（一八七九）は二五名中二名、一三年（一八八〇）は二名中一名、一四年（一八八一）は三名中一名、以上一四年卒組までに八三名中、四三名と半数を超える者が加わっている。ところが、良三郎が在学中の一五年（一八八二）は、卒業生一八名中一名、卒業時にあたる一六年（一八八三）になると、同期卒業生（高等科および中等科卒）五三名中四名と急激に減っている。（千原勝美「奨匡社と教員」『有賀義人先生退官記念論文集』（昭和五二年二月刊）所収）奨匡社加入者数の減少だけで、民権運動の衰退を論じるのは、いささか資料不足の感がするが、松本地方の自由民権運動は奨匡社の存在を除いて考えられないので、加入者数の減少を表向きの自由民権運動から教員層が手を引いたものと判断するのは、あやまりではないであろう。松沢求策とともに国会開設の請願に上京した上条蛸司（東筑摩郡中山村埴原学校教員）が一四年（一八八一）五月には、政治運動から身をひき、小学校へ戻ったり（有賀義人『信州の国会開設請願者上条蛸司の自由民権運動とその背景』、奨匡社創立委員のひとり浅井冽も一四年には松本中学校教員となって運動の実務から遠ざかっている）。

（5）自由民権運動に関する兄君十と良三郎との違いについては、すでに論じているので、その箇所を引用しておきたい。「三川とは異なり奨匡社員となり自由民権運動に進んで参加した君十の師範時代前半は、師範松本支校内で、民権運動がもっともさかんであった時期と一致している。兄弟とはいえ、かならずしも資質、思想、信条など類似するとはいえないわけで、君十は、後年明治三年（一八九八）には県下の小学校で用いる「習字帖編纂委員」に秋野太郎、稲垣作太郎らと選ばれており、義父手習師匠犀頭学舎川船相重（実母そふの兄）直伝の資性はあらそえないといえるが、一方、三川は、昆虫学に精通し、理科全般にくわしく、自然科学者肌の教師であった。このように、両者の資質、志向にかなり違いのあるのは、むしろ当然であろうが、自由民権思想に、関心を示しながらも一方は陽性、他方は陰性ともいう反応を示すのは、その意識的な人格形成の時期である師範学校時代の校風の推移となんらかのかかわりがあったといえないか。（拙稿「上原三川（二）―日本派俳句運動の地方への伝播の状況Ⅱ」（信州大学医療技術短期大学部紀要第二号）所載）

明治一六年（一八八三） 一八歳

○二月、長野県師範学校松本支校第三期卒業。

○六月、師範二校制を廃し、松本町に本支校合併、一校制を実施。

○七月一七日、同校第四期（高等師範学科）卒業。¹⁾ 兄君十も同じ

ときに師範学校高等師範学科を卒える。当時校長には、開発主義

教育学をアメリカで学び帰国した能勢栄が、前年七月以来就任し

ており、従来の師範学校の校風が一新されたといわれる。³⁾ 良三郎

の師範学校時代に蒙った影響、自由民権思想にめざめた師範生の

政治への積極的な関心については、すでに触れた。他にもう一点、能勢校長による、「己れのために学問し、己れの生活を高め」るのが学問の本道だという欧米の新しい実利主義思想の影響も、以後の良三郎の生き方にみられる。

○卒業後、郷里の青島学校、南安曇郡梓村下角影の三育学校などに、数か月教鞭をとったともいわれるが、たしかではない。良三郎自筆の履歴書に出るのは、一七年(一八八四)からである。

(1) 前年一五年(一八八二)九月一五日、新たに布達された「師範学校規則」により、修業年限が初等師範学科一か年、中等師範学科二か年、高等師範学科四か年となったが、すでに在学中の者は、前項一四年注(1)に記した、明治九年一月布達の「長野県師範学校教則並に生徒取扱規則」の適用を受けたものと推測される。したがって良三郎は、四期二か年の修学で高等師範学科を卒えた。

(2) 君十は、良三郎とは三歳違い。師範学校の高等師範学科を卒えたのは、同期。入学は明治一二年(一八七九)。第一期を一二年一月に、第二期を一三年一月に終えているから、第三期あるいは四期のときに、なんらかの事情でおくれたものと思われる。本来ならば、一四年卒のはず。

(3) 能勢栄は、嘉永五年(一八五二)七月、江戸の旧幕臣の家(府下麴町区内幸町二丁目一番地、能勢泰助二男)に生まれたが、渡米し、苦学しながらオレゴン州バシフィック大学理学部を卒業、明治九年(一八七六)に帰国。明治一五年(一八八二)当時、大野長野県令は、師範学校の長野・松本両校をめぐる対立解消、自由民権運動に熱中する師範生対策などを期待して、学習院教授から能勢を招聘した。着任二か月後には、師範学校教則大綱を改正し、資質のすぐれた教員を養成するため、さまざまな手段を講じ、一年後には、「生徒ノ品行大ニ改良セリ」

粗暴過激、教唆煽動ノ言論ナシ」と目から語るほどになったといわれる。

(4) 能勢の教育理論は、それまでの注入主義教育学に対して、ペスタロッチやジョホノットから学んだ開発主義教育学の立場をとった。「口に自由を唱え教育をものはなれて大言壮語する風潮に対しては、『私を捨て、国を愛するとか民権とか国権とか騒ぎたてるのは愚の骨頂で、己れのために学問し己れの生活を高めよ』という徹底した実利主義の立場をとり、やがて、信州教育に新風をふきこんだ。」(駒込幸典「能勢栄」『信州の教師像』所収)

明治一七年(一八八四) 一九歳

○三月一五日、南安曇郡村立細萱学校四等訓導となる。月俸一五円。

○七月三〇日、同郡村立穂高学校四等訓導に転任。⁽¹⁾月俸一五円。

なお、島内村戸長役場の明治一七年国民兵名簿に三三名中の一人として登載されている。良三郎姉もやが、南安曇郡梓村河越小平長男惣左に嫁いでいたが、四月二二日叔父市郎次のもとに帰る。

後に、一三年(一八九〇)三月、東筑摩郡島立村佐々木了海と再婚。さらに、夫死後、浅間温泉千代ノ湯赤羽忠九郎の後妻となる。

後年良三郎が千代ノ湯に寓居したのも、姉の嫁ぎ先の縁による。▽八月、白井毅東京師範学校附属小学校訓導から長野県一等訓導南安曇郡小学督業となる。白井は以後、県内教育界に大きな影響力をもち、良三郎とのかかわりも深い。

(1) 良三郎と師範同期卒業の寄藤好実¹⁾は、卒業と同時に穂高学校の雇

教員となり、一六年（一八八三）一〇月には同校四等訓導となつてゐる。一七年には、東筑摩郡小学督業に転じてゐるので、良三郎とは行き違いか。のちに、良三郎が松声会を結んだとき、紫軒と号し加わつており、師範以来の親交は長くつゞいてゐる。

明治一九年（一八八六） 二一歳

○一月八日、東筑摩郡和田村一七三番地ノ内二番、上原肇次・きんの養嗣子として入籍。妻た（一七歳）は肇次の長女。肇次は当時南安曇郡豊科の警察署長をしており、家族とともに豊科に住居。良三郎の学才を識り、女婿に壺望したものである。

○三月三十一日、学区改正のため、穂高学校四等訓導解職。

○八月二十五日、穂高学校四等訓導兼校長となる。月俸一六円。

良三郎次姉よし（通称よしへ）叔父市郎次の嗣子銈市と結婚していたが（戸籍上は内縁）、一〇月三十一日死去。二七歳。

明治二〇年（一八八七） 二二歳

○四月一日、改めて南安曇郡村立穂高小学校訓導兼校長となる。月俸一六円は前年と同じ。

○五月二二日、妻たた死去。一八歳。

明治二一年（一八八八） 二三歳

○一月六日、病氣（肺結核）のため依願退職。

明治二二年（一八八九） 二四歳

○三月一二日、東筑摩郡立東筑摩高等小学校訓導となる。月俸一五円。

○九月三日、同郡村立和田尋常小学校校長兼訓導に転任。月俸は変わらない。

○一二月二四日、上原あさと婚姻、入籍。あさは先妻たの妹で、たた逝去後、良三郎への話があり、本年に入りすでに結婚していたもの。

○兄君十・いち夫妻の次女ひさみが一〇月二八日に出生。後に婿養子川船和夫を迎え川船家の嗣子となる。⁽¹⁾

(1) 兄君十は、すでに東筑摩郡島内村川船佐代重長女いと結婚し、長女よし（明治一七年（一八八四）六月六日生）をもうけていたが、よしは後に、明治三七年（一九〇四）一月一七日、二〇歳で死去。川船家は次女ひさみが継ぐ。詳細は後掲の家系図参照。

明治二三年（一八九〇） 二五歳

○一月三日、長男寅太郎出生。

○三月三十一日、上伊那郡立上伊那高等小学校訓導に転任。月俸一七円乃至一八円。

○六月八日、和田村の居宅、昼火事（失火）により全焼する。

○七月一七日、長野県知事より教員地方免許状を受ける。

明治二十四年（一八九一） 二六歳

○一月七日、実母そふ萩原家より離婚⁽¹⁾。川船相重方へ復籍。

○三月二十六日、そふ死去。六〇歳。翌二七日島内村五八九番地へ分家の届出をし、四月一五日、良三郎弟益一が分家の養嗣子となり、六月三日相続⁽²⁾。

○二月二三日、長女その出生。

▽南安曇郡東穂高村に、東穂高禁酒会が二月二〇日、井口喜源治、望月直弥らにより結成される。

(1) 弥曾次とそふとの間にどのような行き違いがあったのかわからないが、そふが六〇歳の高齢で離縁となり、二か月後に逝去するという事実は良三郎にある感慨をもたらしたと推測される。弥曾次は、翌二五年（一八九二）二月二六日には、南安曇郡安曇村から後妻よのを迎えている。また、弥曾次が新橋街道筋にいとむ蚕網製造販売の大黒屋も、そふ逝去のこの年、廃業したよう。

(2) 益一は東京に出て、写真屋となり、後年明治四三年（一九一〇）死去。益一の死をもって分家は絶家となる。

明治二十五年（一八九二） 二七歳

○四月三〇日、上伊那郡立上伊那高等小学校廃止に付き解職。

○五月二八日、上伊那郡伊那村外三ヶ村組合村立上伊那高等小学校訓導となる。本科正教員、月俸二〇円。

○五月六日、兄君十が東筑摩郡村立島内小学校校長となる⁽¹⁾。

(1) 君十は、師範卒業以後、東筑摩郡新村、松本町、里山辺村などの

小学校訓導又は校長を歴任。島内には、三〇年（一八九七）五月、良三郎が就任するまで在職することになる。

明治二十六年（一八九三） 二八歳

○一月一七日、養祖母りん死去。七八歳。

○三月二日、上伊那高等小学校訓導兼任校長。月俸二〇円乃至二二円。

○一〇月三十一日、病氣（肺結核）のため依願退職。

○一月二日、東筑摩郡村立和田尋常小学校訓導兼高等小学校訓導となる。本科正教員で月俸二五円。しかし、病気がちで、この年、二月八日から翌年一月三〇日まで休職。

▽正岡子規は前年二月一日付で新聞「日本」（社長陸羯南）に入社し、本年二月三日より「日本」紙上の文苑欄担当となる。俳句革新運動の舞台となる紙面である。

明治二十七年（一八九四） 二九歳

○四月、矢ヶ崎奇峰が和田高等小学校へ転任。首席訓導の良三郎とは、この時点では格別親交を結ぶにいたっていない⁽¹⁾。

○前年来の持病（肺結核）の悪化は、五月四日から九月三〇日まで休職せざるを得なくなり、ついに九月末、休職期限満期となったため和田小学校を退職。退職を機に上京し、芝区愛宕下町二丁目北里伝染病研究所に入院する。

○七月一四日、父（伯父）相重死去。七四歳。兄君十が川船家を相続。

○八月二三日、君十の妻いち（川船佐代重長女）死去。三一歳。

▽二月十一日、正岡子規が編集主幹となった新聞「小日本」が発刊される。第一面の俳句欄には、七月一五日の終刊まで四〇〇名ほどの投句者があるが、矢ヶ崎奇峰もその一人。奇峰の掲載句初出は三月二日「牛の背に陽炎立つや田舎道」、終刊までに同紙の文苑欄に一三句載る。

(1) 「宿直室で一寸顔を合せたのみで、殆んど君とは交りがなかった」
（矢ヶ崎奇峰「上原三川のことども」信濃教育、昭和三年一月号）という。良三郎が休職に入るのは、五月四日からであるが、それまでも休みがちであったのであろう。休職からそのまゝ退職となり、上京し入院加療に入り、交流する機会がなかったのである。

明治二八年（一八九五） 三〇歳

○一月一五日、次男友彦出生。

○一〇月八日、長野県知事より小学校教員免許状を受ける。

○北里の患者仲間にさそわれ、加療のつれづれに和歌を詠み俳諧の発句を作る。和歌は佐々木信綱⁽²⁾、発句は其角堂永機や機一あるいは角田竹冷に添削を乞うたもよう。

▽良三郎の同室患者として、直野碧玲瓏が金沢から上京し、加わったのもこの年か。碧玲瓏は国民新聞（社長徳富猪一郎）編輯局員となり、秋には子規に入門している。⁽³⁾

▽矢ヶ崎奇峰が四月に子規庵を訪うが、たまたま従軍中で子規に会えず、内藤鳴雪居をたずね、河東碧梧桐と三人で作句する。東京、大磯に十日間滞在。東海道を経て、伊勢、京都、奈良、吉野、大阪などを一巡して帰松。新聞「日本」子規選俳句欄に一月六日から一〇月一三日まで奇峰の句が一〇句載る。

(1) 郷里において、桂園派の歌人河野通重（幾蔵、常吉の父）から早く和歌を学び、和歌に關してはすでに心得があった。

(2) 「僕の友人上原三川君が曾て和歌を佐々木信綱氏に就て学んで居たところ、佐々木氏の為めに歌道を学ぶ者が俳諧に遊ぶのは宜しからぬことぢやと説諭されて、折角遣りかけた俳句を断然擲つて終ったことがある。僕はそんな尻の穴の小さいことを言つて居たら仕方がない。此際廢止するのは君の為め甚だ不得策だといつて無理から勧めてどうかこうか再び遣り始めることにしたが、其後三川君が子規氏を根岸に訪ふた際例の短歌論が始まつて、三川君は初めて眼が覚めたといつて居た。」（直野碧玲瓏「故正岡子規氏」はたてがひ第二巻第三号、明治36・5・25）

(3) 「僕が初めて君と逢ふたのは明治廿八年の秋であつたかと思ふ。お互に肺病同士だから先づ病氣の話略血がどうだとか熱がどうだとか、僕は当時北里博士の厄介になつて居たから博士の治療法や摂生法などを話して互ひに慰め合つたりした。君は従軍して金州で略血し散々な目に逢つて神戸迄帰されたこと須磨で静養したことなど話され、夫れから新聞の話文学の話友人の話で、彼是れ二時間以上も長座したことを記憶して居る。」（直野碧玲瓏、上掲誌同一文）

明治二九年（一八九六） 三一歳

○二月二四日、妹（従妹、相重三女）かつ江、河野常吉と結婚。⁽¹⁾

○新聞「日本」九月八日子規選俳句欄に「隣から来てぶらさがる糸瓜かな」がはじめて載る。この句を含めて、二九年には「日本」に八句掲載される。因に、矢ヶ崎奇峰は一五句、奇峰の他には飯島八千溪（上伊那郡飯島村、小学校教師）が七句。直野碧玲にすすめられ、前年来の「月並俳句」詠草を子規に添削を乞い、しだいに日本俳句になじんでいく。⁽²⁾ 根岸に子規をはじめて訪ねたのもこの年である。碧玲瓏の他に、弘光春風庵（高知）、山本東洋（長野）、竹采庵などの北里伝染病研究所の同病患者仲間がともに新派俳句に熱心であった。

○子規直門の俳句鍛錬のグループ、月次十句集に一〇月（はきもの）十句）から参加。ひきつゞき、本年は、十一月（女）十句）、二月（飯）十句）にも出句。

○子規に入門を機に、三川と号したのか。それ以前、立木といっていたことがあるという。三川とは、信州には、三つの大川があり、自身は川船三兄弟の一人なので名付けた由。（以下、本年譜中でも文学事項に関しては三川を用いる。）

○二九年の発表句数一三句。（現在判明するもの、以下各年毎の句についても同じ。）発表あるいは収録機関は、『承露盤』、『月次十句集』、『新俳句』『新派俳家句集』、新聞「日本」。

▽奇峰は四月に上京し、滞在一ヶ月、この間に子規庵に出入する。日付二九年春および同夏、子規庵での句会稿が残されている。内藤鳴雪、高浜虚子、河東碧梧桐、佐藤紅緑、五百木飄亭、

佐藤肋骨、大野西竹、福田把栗、下村牛伴、田岡爛腸などと交流を深めている。

▽日本派俳句グループの信州におけるさきがけ、松声会が奇峰により結成されたのは、本年春か。当時の同人には、奇峰の他に寄藤紫軒（好実）、笠原半仙、三村鉄水（寿八郎）、太田東街（水穂）らがいる。三川が加わるのは、翌三〇年（一八九七）。松声会の結成は、全国の日本派俳句グループの中では、松山の松風会について全国二番目に早い。

▽岡野知十「俳諧風聞記」（毎日新聞、二八年一〇月）が出るにおよび、本年に入り俳句流行の声はいよいよ高くなる。子規は三月から月例の運座を、四月から月次十句集をと新しい俳句運動のもさくを開始する。子規の作句数三〇三八句と生涯でもっとも多産な年となる。碧梧桐が「新声」、虚子が「国民新聞」の俳句欄選者となり、まさに日本派俳句興隆の年といえる。

（1）河野常吉は文久二年（一八六二）安曇郡（現松本市）大銅新田村生まれ。長野県師範学校を卒業後、さらに慶応義塾に学び、この年八月には北海道庁嘱託となる。後に大正四年（一九一五）から一三年（一九二四）まで「北海道史」編集主任。北海道史研究の先駆者。昭和五年（一九三〇）逝去。六九歳。川船かつ江は明治六年（一八七三）九月二十五日生まれ。この年、九月三〇日に松本尋常高等小学校訓導を退職し、北海道の常吉のもとへ渡ったものか。

（2）現在判明中の三川の俳句で、発表年月（又は作句年月）がわかるのは一〇三八句。その中でもっとも古い句が子規の『承露盤』（二八年（一八九五）から三三年（一九〇〇））までの日本派俳人の句を四季に類

別した手控句稿」二九年夏に収録されている二句「苔清水草鞋ひたして
別れけり」「小柄杓で女水打つ戸口哉」。

明治三〇年（一八九七） 三二歳

○三月六日、三川の発起により、〈日本俳句集〉出版（冬の部より分冊で順次刊行、出版社は民友社）の件、子規の賛意を得て正式に決定⁽¹⁾。

○四月一八日、子規、新聞句稿切ぬきを三川へ送る。〈日本俳句集〉「冬の部」校閲了、「秋の部」校閲中の子規は、四月下旬に三川が松本へ帰国ときき、出版中止にならずやと気遣う。

○四月下旬、北里伝染病研究所を退院し、帰郷。東筑摩郡島内村青嶋、兄君十の家に寄寓し、和田村の養家先から妻あさ、長男寅太郎を呼び寄せる。寅太郎は尋常小学校二年生。

○五月三日より東筑摩郡村立島内尋常小学校訓導となる。月俸二〇円。本科正教員尋常科勤務。

○五月一三日、島内尋常小学校長であった兄君十が、東信の埴科郡坂城尋常高等小学校長に転任した後を受けて校長に就任する⁽²⁾。
爾来三七年（一九〇四）四月二七日まで足掛け八か年在職することになる。

○五月二三日、〈日本俳句集〉を『新俳句』と書名が決まったのがこのころ。子規は、『新俳句』稿「秋の部」校閲後、六月末から健康がすぐれず、「夏」「春」「新年」の句稿校閲を碧梧桐、

虚子に代りを依頼したい由、申し出る。子規の校閲九月まで中断する。

○九月一三日、『新俳句』出版計画が一部手直しとなり、当初の分冊から合本一冊刊行に変更される。そのため収録句数きびしく削られる。

○一〇月二日、『新俳句』句稿、子規による第一回校閲完了。三川の手元にすべて集まる。なお、第二回校閲は二月一〇日ごろ行なう。

○十一月二〇日、『新俳句』出版の具体的交渉を直野碧玲瓏・中村楽天へ一任するむね、三川から連絡する。

○松声会に三川が出席するようになり、松声会の存在が県内はもとより、全国の日本俳句グループから注目される。矢ヶ崎奇峰との交流が頻繁となる。

○三〇年の発表句数一〇六句。発表あるいは収録機関は、『承露盤』、『月次十句集』、『新俳句』、『新派俳家句集』、『俳句会稿』、『春夏秋冬・春之部』、新聞「日本」。

▽本年一月に、松山で柳原極堂ら松風会グループにより俳誌「ほととぎす」が創刊され、翌三一年（一八九八）一〇月からは東京へ移され、虚子が中心となり続刊される。

▽十一月五日、『新派俳家句集』（近藤泥牛編、求光閣書店刊）が出るが、新派を羅列的に網羅した編集に対し、子規をはじめ日本派から批判が出た。

▽岩本木外(明治五年(一八七二)下諏訪高木生まれ、尋常小学校教員)、関紫竹とともに、日本派の新俳句運動に共鳴し、諏訪に二葉会を興す。諏訪地方の日本派俳句グループの結成は松声会とともに県内では早く、本年五月に交阿会(竹舟、四迷ら)、一〇月に鴉社(亮湖、松月、喜月、挂山、栗庵ら)がつくられている。

(1) 〈日本派俳句集〉『新俳句』とまもなく名称決まる)は三川ら熱心に俳句(発句ではない)を学ぼうとする者にとりぜひ必要なアンソロジー。河東碧梧桐や高浜虚子でなく新進の三川が発起したところに、当時の日本派の自由なふんいきが感じられる。子規は、明治の新題たとえば、冬季では、冬帽、手袋、やきいも、毛布、襟巻、冬服、ストローなどを大胆に入れようと提案し、みずから句稿の校閲を行なう。

(2) 島内尋常小学校は明治一九年(一八八六)四月に、それ以前村内にあった四つの学校、平瀬学校(学校長あるいは首座教員河野彦司)、磨智学校(藤田道明)、青嶋学校(池田正誠)、高松学校(岩根友治)が統合され、島内学校となり、二五年(一八九二)四月にはそれが島内尋常小学校へ移行、さらに三二年(一八九九)に高等科が併置され、島内尋常高等小学校となるもの。島内学校の校長は、三川と師範同期で親交のある洞沢諫吉であり、洞沢の後を三川の兄君十が校長になった。

(3) 全国の日本派俳句グループの結成は、二九年(一八九六)から三〇年(一八九七)前半にかけて続々となされる。これは、在京俳人の新派俳句運動が地方の新聞、雑誌を動かし、それらのマスコミとの関係のなかで、生まれたもの。松山の松風会、松本の松声会の他に、二九年九月には京都に京阪満月会(鼠骨・露石・青嵐・紫明ら)、三〇年一月には仙台に奥羽百文会(紅緑・鬚男・樵村・古奥ら)、四月には金沢に北声会(秋虎・洗耳・秋竹ら)などが結成された。

明治三十一年(一八九八) 三三歳

○三月一四日、上原三川・直野碧玲瓏共編、正岡子規『新俳句』⁽¹⁾民友社刊行。日本派最初の総合句集である。

○三月二六日、夜、新橋大火のため、浅沢源一郎所有となっていた大黒屋建物類焼する。

○四月二一日、養父肇次、隠居の形をとり分家する。長男寅太郎戸主となる。

○八月一九日、妻あさ死去。二六歳。東洋軒心操自薫清大姉。双生女児出産後の衰弱のため。双児も七月三〇日(華顔嬰女)、八月五日(玉顔嬰女)とそれぞれ死去。このとき、三川は長男寅太郎に僧侶になることをすすめたという。⁽²⁾妻の死後、寅太郎を和田の祖父母のもとへ帰し、三川はひとり、島内村新橋にある山吉三清楼(浅沢源一郎経営)の二階に下宿することになる。

○三川が島内へ赴任し二年目。来年度より高等小学校が二年制から四年制になるに際し、校舎の増築や校地拡充が行なわれたもの⁽³⁾か。

○三一年の発表句数三三句。発表あるいは収録機関は、『承露盤』、『月次十句集』、『ほととぎす』、『春夏秋冬・春之部』。

▽奇峰、四月、東筑摩郡和田高等小学校から松本中学校助教諭へ転任。この年、太田水穂、川崎杜外らと松本に文学同人会をおこす。「ほととぎす」第二巻二号(一一月一〇日発行)地方俳句界

欄に奇峰、松声会報を出す⁽⁴⁾。はじめての松声会報である。

▽飯田松声会が二月一日、北原芋作（痴山）を中心に、愚然子、風外、孤村、芙蓉らで結成される。

▽東穂高禁酒会メンバー井口喜源治、望月直弥、穂高地区の芸妓設置に強硬に反対しついに東穂高尋常高等小学校教員を追われる。喜源治は一〇月豊科組合高等小学校へ、さらに、十一月二日小学校教員を退職。これよりさき、十一月七日、東穂高村矢原の集会所において研成義塾発足。直弥は、十一月二〇日付で北安曇郡北城尋常小学校へ転任することになる。

(1) 子規序、鳴雪題言、虚子序。明治の新俳句は明治二五年以後のものとし、本句集には、三〇年冬の作まで収録。句数四八七〇句、作者五九八名。本文四〇二頁、下村為山のすみの装画表紙、さらに三十葉の挿絵が入り、四六判略装の製本。天明よりも精細に、蕪村よりも変化の多い、明治新俳句の嚆矢の句集。

(2) 「三一年母が死去したとき父は私に坊主になる事をすすめましたが、何といっても応じない。その折坊さんが来て、お経を上げて居たが、長き夜に木魚をたく狸かなと詠んできかせました。」（上原寅太郎「上原三川のこと」講演草稿）

(3) 島内尋常高等小学校学事年報丁号第一表、公学費支出表をみると、本年度にかぎり、四四五一円という多額な新営費を支出している。そのために本年は支出総額が六四六四円。前年三〇年（一八九七）は一六六一円であった。これは、翌三二年（一八九九）から高等小学校が従来の二年制から四年制になるため、校舎をはじめ学校全体が手ぜまになるという機会に校舎増築を行なったものか。

(4) 「五六の俳友を得て、松声会の起りしは去年の花散る頃なりけ

む、暑往寒来今歳復秋に入る。会友の離散時にありといへども、今や毎月会の出句者十二三名、月毎に兼題を分ち時々相会して雅懷を暢ぶ。其間多少盛衰なきにあらざるも亦以て新派の俳句の漸次に周囲の注意を惹くに至れるを知らん。此時に当てほととぎす一大改善を為す。此指南車あり会友大に斯道に奮はんと欲す。」

右の文中、松声会結成時期に関し、「去年の花散る頃」とあるのは、「ほととぎす」の発行日から推して、三〇年晩春にあたる。もし、そのような期であれば、三〇年四月下旬には帰松していた、三川の参加が当然であったであろうし、また三川の名が記載中にみえないはずはない。いかなる事情か推測しかねるが、このままの記事だとすれば、「去年の花散る頃」という時期は奇峰の記しあやまりであろう。一昨年、すなわち二九年来に松声会は結成されている。

明治三二年（一八九九） 三四歳

○二月、子規を中心とする月次十句集、兼題「小」の幹事となる。幹事を引き受けたのは、二回目。

○「ほととぎす」募集俳句、子規、四方太、鳴雪、虚子、露月、碧梧桐の各選者に入選し、三川の活躍が目立つ。「ほととぎす」募集俳句投句家各地分附表（「ほととぎす」二巻二二号明治三二年九月）によると、信濃は二八名。これは、東京六七名、大阪三七名について多く、以下、武蔵二名、伊予一八名、出雲一四名の順である。

○九月初ろから松本地方を中心とする地方新聞「信濃日報」の俳句選者となる。

○三二年の発表句数八八句。発表あるいは収録機関は、『承露盤』、

「月次十句集」、「ほととぎす」、「春夏秋冬・秋之部」、「信濃日報」。
 ▽一二月、長野県下の郡視学を集め、県知事の訓示がある。その中で、就学奨励、実業教育の督促は、「国力ヲ充実シ国勢ヲ伸張スル」点に目標をおくむねが強調される。東筑摩郡小学校長会でも、前年よりも一段と実業的教育をすすめる具体策が論議されている。

▽奇峰、三月、北安曇郡立中学の創立専務委員として大町へ転任したが、中学設立不認可のため、大町尋常高等小学校雇教員となる。

▽三川とともに、日本派新俳句運動をすすめる岩本木外が一二月「諏訪文学」を創刊。三四年（一九〇一）十一月終刊。

（一）明治三十七年（一八九四）九月から昭和十五年（一九四〇）六月まで、松本を中心に出される四頁大の日刊紙。発行部数は三〇年代で二五万といわれる。松本地方最大の新聞、三川はこの年から選者として係わりを持ち、松声会報「松声会小集」が常時掲げられている。しかし、日報の俳句は新派ばかりではなく、旧派の歌仙や京都花本聴秋宗匠撰とか松本洋々舎帆来撰三ツ折なども載っている。

明治三三年（一九〇〇） 三五歳

○八月五日、東筑摩郡交詢会主催、理学博士坪井正五郎の人類学夏期講習会が松本に開かれ、島内小学校の職員とともに聴講する。⁽¹⁾

○九月一四日、北安曇郡大町小学校で開かれた名和靖の北安昆虫

講習会に参加。名和靖と会う。東筑摩郡から出席者三名中の一人。以後しばしば、名和昆虫研究所（岐阜市京町）へ出向いて昆虫学を修めている。三川には「テントームシの話」、⁽²⁾「名和昆虫研究所害虫標本目録附解説」、⁽³⁾「同益虫標本目録附解説・教育用標本目録附解説」、⁽⁴⁾「普通昆虫百種」、⁽⁵⁾「昆虫の話」など、昆虫学に関する五種類の草稿が残されている。そのうち、イ、ロ、ハの三種の草稿はいずれも三川独自の研究著作ではない。イは名和梅吉の論文（明治三二年（一八九九）八月発表）を三川が適宜まとめたものと推定される。⁽²⁾ また、ロ、ハは、名和昆虫研究所の標本を紹介したもの。ただし、ロ、ハの紹介文（解説）は三川独自の文章である。ニ、ホに関しては、三川のオリジナルな著述と推定され、とくに、ニは、一、「昆虫とは何ぞ」の定義からはじまり、七、「昆虫採集と標本製法及び保存法」まで、七項目にわたって昆虫学の総論が述べられ、さらに、後半、四一種の昆虫の実態が各論として付けられている。ホは、ニの総論部分を独立させて、推敲し浄書したもの。以上の五篇のうち、イは本年後半か、翌三四年（一九〇一）早くにまとめたもの。ロ、ハ、ニ、ホは、三四・五年（一九〇一・二）にかけて、島内青年会や改良会で昆虫講話をした折、実地指導に用いたものか。

○一〇月一四日、郷土の遺物、遺跡、風俗、習慣などの研究に力を入れるために、東筑摩郡下の小学校長とともに、松本人類学会を設立する。⁽⁴⁾

○「信濃日報」の三川選俳句欄へ、平林岐水（誉一郎）、北原芋作（阿智之助）、上条頓風（蠲司）、間宮長宗、笠原半仙など中南信地方の日本派グループの代表が投句をしている。

○三年の発表句数五二句。発表あるいは収録機関は、『承露盤』、『月次十句集』、『はととぎす』、『信濃日報』。

▽奇峰、二月二三日付で 大町尋常高等小学校訓導、本科正教員（月俸三〇円）となる。

▽白井毅、四月から東筑摩郡視学（給四級俸）となる。

▽一月、木外、子規を病床に訪い、虚子ともしばしば会う。

（東征日記）

（1）「会員一七九名に達し、内東筑より出席せしもの一六九名、他郡より来りしもの十六名あり、坪井博士の人類学耳新しき講述も多かりし」（『信濃教育会雑誌』一六七号）

（2）和紙一三丁、テントウムシの図が表に三〇、裏に二四、彩色がほどこされている。本文に入ると、「テントウムシの種類に付きて」と題す名和梅吉の三〇〇字程の短文が記され、次に、廿八星テントウムシ以下テントウムシまで二九種類のテントウムシの特徴が詳述されている。

（3）和紙五五丁、目録として、一、昆虫とは何ぞ 二、昆虫の種類と分布 三、昆虫の形体 四、昆虫の変態 五、昆虫の彩色 六、昆虫学の必用 七、昆虫採集と標本製作法及び保存法 以上七項目が総論であるが、のちに推敲し浄書した「昆虫の話」稿では、「二、昆虫の種類と分布」を「昆虫雑記」として最後七にあてている。総論だけで、一応まとまった著述にしようという目論見があったものと推測される。なお「普通昆虫百種」と名付けられている点からすると、百種の昆虫に関し、書く予定があったと考えられ、実際書かれたのは、四一種であるが、五

二種の昆虫名が掲げられている。解説は具体的に文章も平易な写実文。そこには、子規に学んだ日本派俳人のユニークな「眼」がひかっている。（『信州大学医療技術短大紀要第三号（一九七七年）』上原三川（三）拙稿に、「昆虫の話」「普通昆虫百種」を翻刻。）

（4）坪井正五郎の「東京人類学会」と気脈を通じ、創設会員は、三川その他に、洞沢謙吉、寄藤好実、三村寿八郎、三井弥太郎、白井毅など、一四人の郡下の校長と郡視学が名をつらねている。

明治三四年（一九〇一） 三六歳

○一月二〇日、次男友彦ジフテリアに罹り和田村の祖父母のもとで急逝。七歳。真源智澄善童子。死の報せを聞いた三川は不思議なほど落ちついていたという。⁽¹⁾あまりにも悲しみが深かったのである。

○三月一日、島内尋常高等小学校長に改めて任命される。月俸三〇円。改めて任命されたわけは、昨年度で、尋常小学校正教科四学年の上に、高等小学校正教科四学年（従来は二学年であったもの）の課程が実質的に完成したため、新しい学校制度にしたがい任命し直されたもの。⁽²⁾

○本年は生涯で、もっとも繁忙な一年。村の教育や文化のセンターである小学校に信念のある意欲的な教師を招き、学校教育の充実をはかるとともに、地域へ入り実践活動を通して、農村社会の生活の合理化、伝統文化の革新をめざす、三川校長の念願が実現へ一歩を踏み出す。四月から望月直弥が島内高等小学校教師に加わる。⁽³⁾直弥の資格は代用教員であるが、俸給は校長職の上原良三

郎(三川)二五円、教頭間宮長宗二〇円について一八円となっており、二年後には教頭と同額になる。いかに好遇され、期待されていたかがこの一事だけでも知られる。直弥は高等科二年の担任であり、生徒に山本一蔵(銅山)がいた。一蔵にとり直弥との出会いがこの年にはじまったのである。直弥が結婚をしたのも本年。三川はその祝いに子規から貰った記念の短冊「鶴の首のどこにかめの首暖かに」を贈っている。

○三川が行なった実践活動のおもなもの。*島内青年会(修養団体)、島内改良会(実践団体)を創設。*児童、生徒とともに農村をまわり、学校で学んだ害虫駆除、益虫保護の実践を行なう。

*方言や年中行事など地域の風俗習慣の保護育成や大切さを説き、みずからどんど焼の唄三九郎の歌詞を改作している。*村人の知的好奇心を涵養するために、村の理髪店に新聞縦覧所を設けさせる。

○九月二五日、三川、内村鑑三と浅間温泉で会い、鑑三の信仰への姿に感動する。⁽⁶⁾

○三川の「信濃日報」紙上、元旦と一月九日の選評「募集俳句に就きて」⁽⁷⁾をめぐる、正風俳諧教会の旧派俳人鳥羽扶揺との間に新旧の俳句論争が行なわれる。

*二月三日、「予が俳句を尊重する所以」(鳥羽扶揺)(以下いずれも「信濃日報」)

*二月五日、「予が俳句を尊重する所以——つづき」(鳥羽扶揺)

*二月七日、「鳥羽扶揺君に答ふ」(上原三川)

*二月一〇日、「再び三川君の謬論を排す」(鳥羽扶揺)

*二月一六日、「三川氏と扶揺との俳論を読みて」(北水楼主人〈奇峰〉)

*二月一七日、「扶揺と三川」(伊川庵主人)

○奇峰が大町在住のため、三川が松声会を中心として句会を主催する。南安曇郡梓村(現梓川村)に庚子会、明盛村(現三郷村)に茶の花会、東筑摩郡片丘村(現塩尻市)に若葉会と、小学校教師や青年層を中心に松声会シンパともいえるべき日本派俳句グループが中信各地に誕生する。

○三四年の発表句数五九句。発表あるいは収録機関は、「ほととぎす」、「信濃日報」。

▽五月二五日、『春夏秋冬』春之部、ほととぎす発行所より刊行される。子規みずから明治三〇年以後の「日本」や「ほととぎす」の選句を編輯した日本派の絶頂期の選集。

(1)「弟友彦がデフテリで急逝したその告げに島内迄夜をかけて行った隣人(和田村の)が帰って、先生は驚きもせず、そうですが、明日学校の事をよく頼んだ上、行きますといふてくださいと云ふたのみで、悲しくもなさそうだと、不思議そうに話した事を覚えています。」(上原寅太郎「上原三川のこと」講演草稿)

(2)明治三一年(一八九八)までは、島内小学校は尋常小学校正教科(補習科に対して尋常小学校発足当初よりの課程をいう)が四学年、高等小学校正教科が二学年であった。が、翌三二年(一八九九)になり高

等小学校正教科が四学年と二学年学修年限が延長され、同時に、正教科に対し、女子のみの専修科が四学年できる。生徒が高等科四年まで揃ったのが、三三年（一九〇〇）。

(3) 望月直弥は明治三年（一八七〇）二月二五日、南安曇郡東穂高村（現穂高町）生まれ。祖父、父ともに日本画家。直弥も雅章の号をもち作品がある。小学校を卒え、東穂高尋常高等小学校の代用教員になった。が、同郷の井口喜源治に兄事し、キリスト教の信仰心が厚く、信念の人であったので、それがために、周囲からは排斥されることがしばしばであった。島内以前の各校はいずれも一年以内のわずかな期間で転任せざるを得なくなっており、島内でのこれからの三年間は、直弥にとりはじめて本腰を入れて教育にあたることでできた貴重な体験の日日であった。その授業がいかに新鮮なものとして生徒の眼に映ったか当時の生徒のひとは、次のように記している。

「教室で内村先生の愛吟詩集をよんできかせ、黒板に新しい短歌など書いて説明し、綴方は自由に書くものとすめた。また修身の時間にはワシントンやリンコルンの話を連続話してくれて人格の向上ということを説いた。理科の時間には酒と煙草の害について口述してノートをとらせ、純潔ということについて意見をのべたり、救世軍の「時の声」を貸し与えたりした。」（田川季彦談）

(4) 「会員には学校教員あり、学務委員あり、役場書記あり、雑多の人が顔をそろえて居た。時には論語の講義、唐詩選の輪講なども行はれた。先生が漢籍に於けるうんちくは嘗て高橋白山に師事したからであり、その講義ぶりは誠に確かなものであった。時には五分間演説、暗汁会、トロロ会、さては角力等リクレーションも加味した催しで、若い者の心を充分にとらえたものであった。」（三川先生の思い出「小原伝利」）

(5) 「壯年者を以て組織した改良会の綱領は、虚礼の廃止、勤労の風尚馴致、納税義務の励行、日常生活の改善に就て卑近の実例を挙げて規約とし、これを実行することであって、会員の門戸には自ら標札を書い

て掲げしめた。」（上原良三郎先生「胡桃沢勘内」「教育功勞者列伝」（昭和一〇年六月刊）所収。）

(6) 内村鑑三が来松するのは、明治三十四年九月二五日と三六年（一九〇三）九月の二回であるが、三川の動向とのかかわりからみて、出会ったのは三十四年と推測される。三川のキリスト教信仰への態度を考える上で鑑三との邂逅は重要である。「キリスト教を信仰した動機はよくわからないが、あまり不運が続いたのも原因の一つであり、祖父が梓川へ先祖の位牌を流した程の信者であった事も一つと思ひます。しかし初めはなかなか、科学的の頭で信仰に入らず内村鑑三氏が浅間に来られた時、訪問して、神のある証拠を話してくれと頼んだ処、そんなら君は神の無いといふ証拠を話してみろと言はれ、やうやくその道へ入ったと話した事があります。」（上原寅太郎「上原三川のこと」）

(7) 本年度新春発表の発句募集を前年一月にやったところ、応募者一三人、句数一七二三句が集まった。その選評に書いた文章で芭蕉や蓼太の喧伝されている句が文学上、無価値なことを三川が強調した。その三川の俳句評価の価値観をめぐる論争が展開した。

明治三五年（一九〇二） 三七歳

○四月、長男寅太郎（高等小学校四年）を退学させて、叔父（益一か）の世話で東京の老舗（小西六）へ住み込ませる。旬日もしないで三川がつれに行き帰国。高等科へ復学。

○五月、島内女子補習学校長、一月島内実業補習学校長兼任。

○一〇月、「ボトトギス」（第六卷一号）の「諸君は如何なる縁にて我新俳句を作り始めたるか」に寄稿。

○三五年の発表句数四句。発表あるいは収録機関は、「ボトトギス」、「長野新聞」。三五、三六年の二年間の作品は現在判明して

いるものがきわめて少ない。「信濃日報」へは掲載しているものと推測されるが不明。ただし、本年は松声会の活動も活発ではなく、三川の作句も少なかったと思われる。

▽四月二七日、岩本木外が編輯者となり、『諏訪新俳句』が上諏訪町三光堂書店より刊行される。

▽四月一五日、『頼祭書屋俳句帖抄上巻』、五月一五日、『春夏秋冬』夏之部が俳書堂・文淵堂より発行される。また九月七日秋之部、翌年一月一二日冬之部がそれぞれ俳書堂より出されている。碧梧桐、虚子の共選による日本派類題句集である。

▽九月一九日、正岡子規死去。

明治三十六年（一九〇三） 三八歳

○一月二八日、「長野新聞」に「尋常四年生の観たる教師」の一文を載せ、島内尋常小学校四年生五名の作文を紹介している。

○二月九日、島内禁酒会満一周年記念会が島内尋常高等小学校で開かれ、会長に望月直弥再選される。

○三月一九日、実父萩原弥曾次死去。七九歳。萩盛院花月仙翁清居士。安曇平でもっとも早いメソジスト派の信者であった。遺言により、三川が喪主となりキリスト教葬を行なう。

○四月、長男寅太郎松本中学校（現松本深志高等学校）に入学。

○八月二〇日、松本の料亭宇川亭で信濃俳人会が開かれ、諏訪、伊那、長野から、県内新俳句運動をすすめている主要なメンバー

が揃う。三川、奇峰、春畦、狸村、頼風、奇遇、紫金桃、河柳、露香、罔両、秋稿、有一、梅塘、琶村、歌朗、活東、栗村、木外、長宗、兜城、四沢、村雨ら。

○九月二三日、胡桃沢四沢、田中歌朗、松本の鉄水三村寿八郎宅で矢野奇遇と会し、沈滞している松声会の再興を論じ、三川、奇峰の奮起をうながす。この日を第二次松声会出発の日、松声会再興第一回例会日としている。四沢、奇遇は後に三九年（一九〇六）三川により信州俳壇の双壁と讃えられた新進。第一次松声会にはいまだ年少で加わっていない。第二次松声会は、第一次よりもいっそう若く、子規の警咳に直接触れないが、熱心な俳人達によって興されたもの。三川らによる日本派の俳句運動がようやく地方に根付いてきたことの証左といえる。さきに掲げた三人の他に、赤羽石雨、赤羽皎々、小林枕山、野村菱堂などがそのような新人である。

○一〇月二三日、文部大臣より小学校教員普通免許状を受ける。

○三六年の発表句数五句。発表あるいは収録機関は、「ホトトギス」、「長野新聞」、「氷むろ」。

▽奇峰、「長野新聞」に一月一〇、一一、一二の三日にわたり「来るべき俳壇」を書く。

▽「ホトトギス」九月号の「温泉百句」論争により、子規死後の碧梧桐、虚子の対立がはっきりしてくる。

▽奇峰、三月に大町から郷里和田尋常高等小学校校長となり転任。

▽山本一蔵が島内高等学校三年進級生徒総代として、三月二三日の卒業式で「高等科卒業生諸君ヲ送ル」送辞を読む。

▽木外、一月「氷むろ」を発行し、四月には長野新聞俳壇選者となる。また「巴人論」を九月八、九、一〇の三日にわたり「長野新聞」に載せる。

(1) 弥曾次がいつ頃改宗したものかたしかではないが、子供達が次々と肺患に罹るといふ一家の悲惨に耐えかねて、という。三川の長姉もやが嫁いだ先で、夫の肺患に罹り、そのため離縁となり戻される。長姉から次姉へ、さらに三川兄弟へという順で、子供達ことごとく肺疾患に冒されてしまう。このような弥曾次の入信の契機と、安曇平でのアメリカ系メソジスト派、美以教会伝導の状況(松本美以教会歴史)や、平田平三による郡下への出張伝導の時期等を勘案すると、弥曾次の入信は明治十年代後半と推測できる。先祖伝来の位牌を焼失したり、梓川へ流したりして、はげしく改宗したといわれる。

明治三十七年(一九〇四) 三九歳

○一月一七日、兄君十の長女よしみ東京で死去。二〇歳。

○二月九日、島内禁酒会満二周年記念会が島内尋常高等小学校で開かれ、会長望月直弥が三選される。会する者会員百名以上。

○長男寅太郎を直弥の聖書講読会に出席させるのも、昨年(1)から本年にかけてか。直弥は内村鑑三に私淑している熱烈なクリスチャン。その反戦的な時局批判の言動が父兄の間に物議をかもすことがしばしばで、そのたびに三川は直弥を擁護する。そのことがときの東筑摩郡視学白井毅との間で直弥解免をめぐる衝突の一因と

なったものか。

○三月二〇日、島内村議会において、小学校教員俸給義務額超過支出廃止に関する件が議決され、島内小学校の代用教員俸給総額を前年度の五割五分減額、全体の教育予算が三割七分減額される。理由は「目下軍国多事ノ時ニ於テ経費ノ節減ヲ要スルヲ以テ」という。校長三川、人事に関し苦慮する。とりわけ、望月直弥をはじめとする代用教員の解免につき、郡視学と意見が合わず、ついに三川自身も退職を決意。

○四月退職に先立ち、山吉三清楼の下宿を出て、島内村東方区奈良井川畔の小宅に移り住む。松声会同人らが三川庵と呼ぶ僑居で、ここに三川は以後一年半程居住することになる。

○四月二七日、七年にわたる島内尋常高等小学校長を病気を事由に依願退職。村内父兄の留任運動がおきている。三川とともに三月末で、島内の教師一二名中八名がやめており、三十七年度は一年間、島内小学校の人事はきわめて変動が多い。

○三川が退職後、貧困のため、寅太郎(松本中学二年在学)は松本中学を中退するが、三川の友人山吉三清楼の家業を手伝うことで学費を出してもらい九月から、復学する。(6)寅太郎の回想によると、「一日中魚を釣っていても勉強せよとは言はない。只落第すれば、同じ事を二度やるからよいといふて居ました。朝寝して登校が一時になっても決して起しません。只小言をよく言はれたのは、字が下手の事とキリスト信者にならない事でありました。」

○退職直後、松本にある私立郁文学校の授業を担当したが数か月後辞退した。

○五月、「閑々日録」を「信濃日報」へ連載。

○「昆虫世界」(岐阜名和昆虫研究所発行) 一月号(通巻七七号)松藻虫に関する懸賞募集句に「捨舟の水の溜や松藻虫」が入選。

それが縁で、同誌七月号(通巻八三号)から三川が逝去するまで(四〇年(一九〇六)六月(通巻一一八号)、塩谷華園と交替に昆虫俳句の選をし、自句七二句の新題昆虫俳句を発表している。⁷⁾

○六月一〇日を投句⁶⁾切日に、第一回「雲」十句集の紙上鍛錬句会をはじめ。出詠者は、三川その他、北原芋作(阿智之助)、岩本木外(永正)、河西河柳(民作)、矢野奇遇(一二)、伊藤一露(仙治郎)、田中歌朗(稔)、矢ヶ崎奇峰(栄次郎)、宮沢季彦(季彦)、胡桃沢四沢(勘内)の一〇名。これは子規の月次十句集に倣いはじめたもの。

○七月一〇日、第二回「朝夕」十句集⁶⁾切、参加者三川他九名。

○八月一〇日、第三回「色彩」十句集⁶⁾切、参加者三川他九名。

○九月八日、『頼祭書屋俳句帖抄上巻』(以下「俳句帖」と略す)の第一回輪読会(「頼祭書屋俳句帖抄講義」と名付ける)が三川庵で開かれる。出席者は三川、奇峰の他に田中歌朗、小林枕山、胡桃沢四沢、矢野奇遇の六名。

○九月一〇日、第四回「時」十句集⁶⁾切、参加者三川他九名。

○一〇月二日、『俳句帖』第二回輪読会、出席者三川他、奇峰、

四沢、歌朗、奇遇。

○一〇月一〇日、第五回「人倫」十句集⁶⁾切、参加者三川他八名。

○同じく一〇月一〇日、俳誌「はゝき木」創刊。三川、奇峰が主宰し、奇遇、歌朗が編集、四沢が一切の事務を担当する。⁸⁾三川は兼題「花火」を選し、秋季雑吟の他「雑録」の一文を載せている。

○一〇月三〇日、北海道札幌に住む河野常吉宛(妹かつ江の夫)手紙で、浅間温泉赤羽忠九郎、もや(三川実姉)夫妻の息子武雄が北海道に移住し開墾事業にあたりたいとの望み実現のために助力を頼んでいる。

○一〇月六日、『俳句帖』第三回輪読会、出席者三川他、奇峰、四沢、歌朗、皎々、奇遇。

○十一月一〇日、第六回「草枯」十句集⁶⁾切、参加者三川他一一名。同日、「はゝき木」第二号発刊。秋季雑吟、雑録を載せている。

○十二月四日、『俳句帖』第四回輪読会、出席者三川他、奇峰、奇遇。

○十二月一〇日、第七回「天地人」十句集⁶⁾切、参加者三川他七名。

○十二月一九日、「はゝき木」第三号発刊。秋冬雑吟、雑録を載せている。

○この年、三川の生活は、七銭の県税戸数割（一等八円以下二一七銭まであり、村で最低額）を払うと手紙を出す金もない清貧の中で、悠々自適、深夜ひとり聖書を誦していたといわれる。

○三七年発表句数一四一句。発表あるいは収録機関は、「昆虫世界」、「はゞき木」、「信濃日報」、「長野新聞」。

▽二月、奇峰、南安曇郡高家小学校に転任。梓橋に寓居。「橋畔雑筆」を書く。

▽三月、山本一藏（飼山）島内高等小学校四年を卒え、四月に松本中学校へ入学。

▽五月一日、白井毅、東筑摩部会春季惣集会で「本年度教育費削減の理由に就て」講演をする。

▽十一月一二日、東筑摩郡視学白井毅、文官分限令第二一条第一項四号により休職となり、長野県を去る。

（1）明治三十六年（一九〇三）かあるいは、三七年（一九〇四）頃の回想として、寅太郎は、「父が校長時代、下に居った望月といふ先生の集りに行けとの事で数回行ききました。行かなければ家に置かないとまで云はれました。然し私はキリスト教信者にはなれませんでした。」と、講演草稿「上原三川のこと」に記している。

（2）望月直弥は、島内小学校において、三川がもっとも必要とした教師であった。学歴は小学校を卒えただけの代用教員であったが、井口喜源治とともに内村鑑三に私淑する熱烈なクリスチャンで、穂高の研成義塾や東穂高禁酒会での直弥のビューリタンのなリゴリズムに、新しい時代の教師像に必要な精神をみてとった三川は、明治三十四年（一九〇一）、東筑摩郡松本村尋常高等小学校から抜擢して直弥を教頭と同額の高給で

島内へ迎えている。島内での直弥の信仰と教育との実践活動がいかなるものであったか。その全体像はつかみがたいが、直弥の分身ともいうべき山本一藏（飼山）を通して、直弥の実践活動の一面を知ることができるよう。

（3）三十六年度（一九〇三）の島内小学校の教員組織を同校字事年報乙第二表でみると、本科正教員五名（尋常小学校三、高等小学校二）、准教員一名、代用教員七名（尋常小学校三、高等小学校四）となっている。代用教員が学校教員の半数を占めるのは当時の小学校の通例。ただしその俸給に関しては、一応の基準があった。代用教員初任給の基準（三十六年二月一日付で郡書記から村長と小学校長宛に出される）は、任命後六か月間の勤務状況および教授法等を観察した上で増額すべき必要をみとめる者は増額し、他の教員との摩擦がないように配慮せよとの主旨で、一、中学校卒業業者ハ之ヲ三等ニ分ケ十円、九円、八円トスルト一、高等女学校本科及技芸専修科卒業業者ハ之ヲ三等ニ分ケ八円、七円、六円トスルコトとある。ところで、島内小学校の代用教員の俸給は次の通り。

二〇円 望月直弥（高等小）
一三元 横山又倍（〃）
一〇円 勝野隆恵（尋常小）
一〇円 中条新平（〃）
八円 河野林一（高等小）
七円 浜もと（高等小）
四円 小原伝利（尋常小）

この中で、望月直弥は、三川校長（三〇円）につき、教頭間宮長宗と同額。当年三四才、勤務校も五校経て、ベテラン教師とはいえ、たしかに高給取。そのことは、三川校長の期待がいかに大きかったかの端的な証左といえよう。

（4）この点に関しては、いくつかの俗伝が流布されており、正確には

つかみがたい。一部不正確な個所を除くと、次の一文などは信用できようか。

「白井は明治三十三年（一九〇〇）東筑摩に来る。但し明治三十七年（一九〇四）四月三川先生退職辞令を伝達せる時は湯本政治視学たりしなり。三月中、白井は上原退職のことを定め、これを湯本に引継ぎたるなり。

河野齡蔵氏は湯本より上原排斥意見を聴きたりといふ。湯本の形式主義、東洋豪傑風、欧化思想、上原の内容主義、基督教的人道主義、漢学思想、斯かるところに一致を見ざりしなり。惜むらくは、今三十四年の後に両者相逢はば齊しく子規の詠風を酌む同友として手を携へて寂然として笑ふべかりしに、天遂に此機会を与へざりき。明治四十二年（一九〇九）なりしか、麻葉会を三川旧居の山吉楼上の一室に開き、望月、胡桃沢、堀内等と共に湯本席に在り、三川翁の靈に礼拝すと称して瞑目黙禱せしことありたり。此会場を択べるもの湯本にして、彼は一度はこの形式を行ひたかりしなり。」（胡桃沢四沢「三川先生伝追補録」昭和一〇年（一九三五）一月）

文中、白井毅が湯本政治視学に三川退職の件を引きついだとの由がみえるが、これはあやまり。白井は、三十七年一月一二日に文官分限令第一条第一項四号により休職となり長野県を去るが、それまで、東筑摩郡視学として活動しているからである。また当時日露戦役のために地方の教育関係予算が縮小され、教員不足をきたし、二部授業をせざるを得なくなった松本尋常高等小学校を例に、郡視学の方針を批判した「奇怪なる教育界」（「信濃日報」社説）という文章が書かれるなど、白井毅批判は、郡内にすでにあったものようである。

（五）三川が退職した翌月、三十七年（一九〇四）五月の島内小学校の教員組織をみると、教頭の間宮長宗、中条藤四郎、河原忠政、それに平瀬分教場の田川志信が残るのみである。そして、間宗、中条も三十七年二月かぎりで島内を去っている。三川在任の三十七年三月末に来た小口幸一が首席訓導となり、新たな教員組織を作っているものの、三十七年末に

は、三川当時の教師は一人河原を残すのみというのは、異常な事態といわざるを得ない。

（六）「寅太郎、山吉主人の義侠により九月より再び中学へ通い居候に付此旨ひさみ（兄君十の長女）へも御話下され度願上候。山吉主人中学卒業迄の費用を貸しくれる事に相成申候。」（河野常吉宛三川書簡）。山吉主人は、寅太郎が三清楼（料理屋）を手伝ってくれるので、学費はくれるというものを、子供に依頼心が昂ずるからと返す約束を三川はさせたという。

（七）三川がとりあげた季語昆虫は、毛虫、あぶらむし、浮塵子、龍虱、風船虫、蛇、瓢虫、虱、衣魚、椿象、天牛、馬追、螻蛄、蚋、尺蠖、蚜虫、田亀、山繭、蜉蝣、雪虫、兜虫、水かまきりの二二種である。

（八）「はゞき木」一号から七号までは、小松甲子太郎が編輯兼発行者。八号から一〇号は丸山尚があたる。「箒木」は敢てこれを以て畳を固うして執て下らぬといふ主義なのではなく、我信州にありて（乃至は信州以外にしても）同好の士の相集て、句作に俳論に、俳文俳話に共に研鑽し、共に披瀝して、文学の小天地を形造らんとするのが余輩同人の主眼とする処である」と奇峰が巻頭言を書いている。

明治三十八年（一九〇五） 四〇歳

○一月五日、第八回「新年」十句集々切、参加者三川他八名。

○一月八日、『俳句帖』第五回輪読会、出席者三川他、奇峰、歌朗、枕山、奇遇。

○一月二一日、「はゞ木」第四号発刊。冬雑吟、雑録を載せ、奇峰が「現時の俳壇」の一文を書いている。

○二月五日、『俳句帖』第六回輪読会、出席者三川他、奇峰、四

沢、皎々、泥雛、華峰、季彦、歌朗。

○二月八日、「二月課題、寒菊」の三川選が「長野新聞」に出る。

○二月一〇日、第九回「女」（春季結）十句集〆切、参加者三川他八名。

○二月二七日、「はゝき木」第五号発刊。雑録を出し、募集句ふとんの選を発表。宮林董哉「野辺送り」、小林枕山「飯食ふ間」の随筆、募集句「氷」石井露月選などが載る。

○三月五日、『俳句帖』第七回輪読会、出席者三川他、奇峰、四沢、歌朗、枕山、奇遇。

○三月一〇日、第一〇回「烟打」十句集〆切、参加者三川他九名。

○三月三十一日、「はゝき木」第六号発刊。雑録を出す。募集句「乾鮭」松瀬青々選が載る。

○四月二日、『俳句帖』第八回輪読会、出席者三川他、鉄水、歌朗、季彦、四沢、奇遇。

○四月一〇日、第一一回「幼少」（春季結）十句集〆切、参加者三川他六名。

○五月一七日、「はゝき木」第七号発刊。三川は新題発掘に意欲を示している。⁽¹⁾

○五月一八日、『俳句帖』第九回輪読会、三川庵からはゝき木発行所（東筑摩郡松本町八六五）へ移る。出席者奇峰、皎々、泥雛、歌朗、山子、奇遇。三川は欠席。

○五月二〇日、第二二回「食物」十句集〆切、参加者三川他七名。

○六月一七日、「はゝき木」第八号発刊。雑録を出す。奇峰の「はゝき木の改良に就いて」、東松露香「一茶の結婚と其生活」、募集句「苗代」内藤鳴雪選が載る。

○六月二五日、第一三回「祭」十句集〆切、参加者三川他七名。

○七月二日、『俳句帖』第一〇回輪読会（最終回）、出席者四沢、山子、歌朗、奇遇。会場は前回と同じはゝき木発行所、三川は欠席。

○七月一四日、第一四回「肢体」十句集〆切、参加者三川他八名。十句集もこれが最後となった。

○九月八日、「長野新聞」に三川選俳句欄を創設。以後、四〇年（一九〇七）七月一日まで、三川の晩年における俳人活動の主要舞台が長野新聞である。三川の選句が出るのは、九月八日以後。九月では、九、一〇、一一、一二、一三、二九日。

○九月一七日、「はゝき木」第九号発刊。雑録、募集新題の他に、直野碧玲瓏の死を悼み、「嗚呼碧玲瓏君」を載せる。

○一〇月一五日、「はゝき木」第一〇号発刊（最終刊）。「十日間日記」、雑録を出す。募集句「行々子」青々選、「橋畔雑筆」奇峰などが載る。

○一〇月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、三、六、八、九、一七、二七日。

○一〇月、島内小学校時代の教頭間宮長宗⁽²⁾の開いた松本義塾を援けるため、通勤の便を考え、浅間温泉千代の湯裏の別宅に住む実姉赤羽もやをたより転居する。義塾は一年程で終幕。

○十一月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、二、三、四、七、九、一九、二一、二二、二七日。翌二月は、五、六、一三、二九日。

○三八年の発表句数（現在判明するところのもの）二五一句で、生涯もつとも多産の年。発表あるいは収録機関は、「はゝき木」、「昆虫世界」、「長野新聞」。

▽四月四日、島内小学校へ新校長佐藤種次郎着任。職員不足のため授業行われず、大掃除その他のみ。

▽六月五日、直野碧玲瓏、金沢鱗町の自宅で死去。三一歳。北国新聞社会部、文芸部記者。北声会を興し、北国新聞紙上で新派俳句を募集し選句を担当した。

(1) この号で、三川は新題として、「すぐり、朝草刈り、洪水、大水、出水、水害、つりふね草（夏季）」を提出し、これらを詠み込んだ句を募っている。

(2) 間宮長宗は奨励社員として活躍した自由民権運動家であり、東筑摩郡村立片丘南尋常小学校長から三四年（一九〇一）二月一九日に三川のもとへ、首席訓導として赴任していた。三七年（一九〇四）十二月には島内を退職。松本義塾は穂高の研成義塾に学び興したものか。

明治三九年（一九〇六） 四一歳

○一月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、一、三、二〇、二七、二八日。二月は、四、六、一五日。

○二月二八日、三月一日にわたり信州の俳人七人の投句を添削し掲げ、「俳句の添削」という一文を「長野新聞」に載せる。三月九日には、同紙上に投句者の一人高池南齡の「三川君の俳句添削を読む」の反論が出る。

○三月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、六、三十一日、四月は、四、六、一七、二一日。

○三月二三日、兄君十が東京麻布で死去。四四歳。

○五月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、六、七、一〇、二〇日。六月は、一、三、一一、一二、二二、二三、二五、三〇日。

この頃紙上でも「昆虫世界」の試みと同じく昆虫を新題として俳句を募集。蚤、野虫、尺取、天牛、螻蛄などが詠まれる。

○五月三十一日、「長野新聞」に「新題俳句募集に就て」を書く。

○七月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、一、一五、二二、二六、二八日。八月は、一一、一六、一九、二一、二四日。昆虫新題、龍蝨の他に、蟬、螢、蝸牛、蚤や青簾、茨、薔薇、栗の花、汗、五月雨、桐の花などが募集季語。

○八月六日、善光寺詣の後、松本に來た伊藤左千夫と浅間千代の湯で会う。四沢の紹介。望月光男、堀内卓造という三川に俳句を教わった二少年も同席。「談笑夜をこめて尽きず」という。三川には、この年三四首の短歌がある。中に、「相見なばよき人なら

し歌よみの牛飼左千夫炭焼たかし」の作があるのもこの年か。

○九月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、二、四、六、一四、一六、一八、二四、二六、三〇日。

○一〇月三日、「蜻蛉とさうして屁」一四句連作を作る。同月二日付「長野新聞」に出る。

○一〇月、「長野新聞」紙上の三川の選句が出るのは、五、八、一八、一九日。

○一〇月二一日、「長野新聞」に「糸瓜の忌」と「俳壇の双璧」他の文章が出る。とくに前者の一文は、九月二六日付「長野新聞」紙上に岩本木外が載せた「子規忌」詠草百句の中に、子規忌を糸瓜の忌と称しているものあるをとりあげて、糸瓜忌と糸瓜の忌との違いを論じたもの。この一文が発端となり、以下糸瓜忌論争がおこる。

○一二月四日、宮林董哉の三川への反論「糸瓜の忌に就て」（長野新聞）が載る。

○一二月一一日、胡桃沢四沢の三川論補強、董哉への反論「糸瓜の忌」に就て」（長野新聞）が出る。

○一二月二四日、董哉は「糸瓜の忌」と用いた例句をあげ、反論を補強する。

○一二月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、三、六、一九、二一、二七日。一二月は、一、一〇、二二日。「つと何を追（ひ）かけ行きしとんぼ哉」「とんぼうの留らぬ杭は無かり梟」など三

川の蜻蛉代表作は二二日に発表される。

○一二月二一日付で、左千夫が三川宛へ沼津から自筆絵葉書に、「不士の野に五里をめぐりつ水海の沖にはこやの山を見にけり」の一首をしたため贈ってくる。左千夫は三川とともに、貌姑射の山のロマンを語り合える人物とみていたようだ。

○一二月、四沢が中心となり、「三川句集」編纂に着手。しかしこれは、完成せずに終る。

○一二月八日、千耳「糸瓜の忌に就て」（長野新聞）という三川への反論が出、一九日には三たび董哉の「人に答ふ（糸瓜の忌に就て）」が出て、論争は年を越すことになる。

○三十九年の発表句数は前年にひきつづき多く二一〇句。発表あるいは収録機関は、「長野新聞」、「昆虫世界」。

○この年短歌三四首を作る。後年四一年「馬酔木」（第四卷第三号）に掲載される。

（1）「先づ松本なる浅間の湯に胡桃沢、望月、堀内の諸子と会す、湯に上原三川子あり、各旧知の人々なれど又初見の人なりけり、談笑夜をこめて尽きず」と左千夫の歌稿「夢科游草」の詞書にある。

（2）九月一九日、木外が中心となり諏訪湖東の真徳寺で催した子規忌の会の詠草に、県内から募った追悼句を加え、百句にして発表したもの。

（3）原文次の通り。

糸瓜の忌

三川

木外選子規忌百句その他にも糸瓜の忌といふ句が幾つも見えた、子規忌を子規の忌といはんは固より妨げなし、されども糸瓜忌を糸瓜の忌と

「の」の字を入れていふは飛んでも無きことなるべし、兵児帯を兵児の帯、猿股を猿の股といはば如何、正岡子規とはいへども正岡糸瓜とはいはず、これさへ知れば糸瓜忌を糸瓜の忌といふの馬鹿げたる事が気が附くなるべし。

(4) これより前に、「新題俳句集」刊行の計画をたて、「はつき木」

「昆虫世界」などで鼓吹募集した新題俳句を三川は蒐め、原稿にまとめていた。その原稿が門下の住山久治のもとにあるという。(胡桃沢勘内『三川句集』編纂後記を参照)

(5) 明治四一年(一九〇八)の項参照。

明治四〇年(一九〇七) 四二歳

○一月一日、岩本木外「ちげん権庵年頭」(長野新聞)が載る。「糸瓜忌」を「糸瓜の忌」とするのはひとつの修辞上の約束として認められるとの立場を説いている。

○一月六、七日、「権庵年頭を読んで木外氏に答ふ」(上・下)

(長野新聞)を載せる。「糸瓜忌」という一語の名詞がかし出す子規追悼の情と「糸瓜の忌」とした場合とは異なるとする自説を説き、「糸瓜忌」を「糸瓜の忌」でもよいとする安易な態度を認めがたいとしている。

○一月八日、平林岐水「糸瓜の忌に就いて」(長野新聞)が載る。

○一月九日、「再び糸瓜の忌に就きて」(長野新聞)を書く。「兵児帯」を「兵児の帯」とするのは滑稽なように、「糸瓜忌」を「糸瓜の忌」とするも滑稽だという。

○一月二十四日、文生「糸瓜の忌に就きて」(長野新聞)が載る。

○一月二五、二六日、北村春畦「糸瓜の忌諸論を論ず」(上・下)(長野新聞)が出る。春畦は県内日本派長老。本論争を三川派と木外派の対立として、折衷案を出したもの。三川の論が正格であるが木外という糸瓜の忌も変格としては許容範囲内だとする。

○一月三〇日～二月一日、臥牛山人「糸瓜の忌の論に就て」(上・中・下)(長野新聞)が載る。

○一月、「長野新聞」に三川の選句が出るのは、四、一〇、二四、二六、二七日。二月は、六日のみ。三月は、四、五、一五、三〇日。

○二月一六日、「手前味噌」(長野新聞)を書き、春畦へ反論する。

○二月二三日、凡翁の川柳「糸瓜十把」が出る。糸瓜忌論争を一

○句の川柳で揶揄したもの。

○三月一五日～一七日、春畦「手前味噌を読む」(上・中・下)

(長野新聞)が載る。

○四月、東京本所区茅場町の伊藤左千夫方に寄寓している胡桃沢四沢宛ハガキで、同月一八日東京座で行われる予定の仏人救世軍総督ブース大將の講演をぜひ聴くようにとすすめている。

○四月に入ると「長野新聞」に出る三川選は多くなり、二、四、

一一、一四、一七、二七、二八、二九日。とくに、浅間温泉に居住する若い門人石川拈華の結婚に際した祝句「蝶々や睦み雛の契りかな」は二七日、同じく滝沢馬雄の男子誕生を祝った句「幸多き春を冢子の生れけり」は二九日に出る。五月は、一〇、一一、

一二、二二日。

○六月九日、浅間温泉千代の湯に長塚節が投宿。三川と終日飲談^①。同日付岡麓宛節書簡に「上原三川、胡桃沢勘内、望月光男の三氏と閑談しつゝあり」とある。その際、節に乞われ短冊数葉を書く。

○六月、「長野新聞」三川の選句が出るのは、一七、一八、一九、二二、二九、三〇日。

○六月、「昆虫世界」(一一八号)の「昆虫文学」(四二)へ「水蟾蜍」二句を載せる。これが「昆虫世界」への三川最後の句となる。

○六月二五日、午前六時宿病肺結核の病状にわかに悪化死去。前夜、いつもの通り「長野新聞」の選句を済ませ、選者吟三句「耳近く蚊が来て鳴いて眠たさよ」「蚊の出づる汚き泥溝を浚ひけり」「撫子は愛らしく百合はなつかしく」を付加している。

遺骸は同日深更、浅間温泉の寓居から東筑摩郡和田村万年寺の墓地に仮埋葬のため送られた。遺骸の葬送に立ち合った者は弟益一、四沢、近親者二三人。当時は農繁期であつたので門人知人には知らせないで、埋葬後に喪を発表した^②。

○六月二七日、「上原三川氏逝く」(長野新聞)という長文の追悼記事が載る。

○六月二九日、四沢「噫三川先生」(長野新聞)が載る。

○六月三〇日、三川旧居、浅間温泉千代の湯で三川居士追悼会が

開かれる。会者は、望月光男、河野負山(源吉)、河野通璋、小穴泥雛(菅司)、堀内卓造、赤羽皎々(明)、矢野奇遇(一二)、胡桃沢四沢(勘内)、三村鉄水(寿八郎)、河野雲峰(齡蔵)、須沢橡堂(万寿喜)、大沢峽村(清見)、矢ヶ崎奇峰(栄次郎)、滝沢漂々(義也)、太田みづほのや(貞一)、滝沢馬雄(久馬雄)、田川義来、赤羽石雨(儒平治)、岩本木外(永正)。外に長男寅太郎、実姉もや、弟益一。当日の会のもようが七月二日付、長野新聞紙上に岩本木外によって記されているので、記しておく。

「奇峰氏の式辞が終りて、遺族の焼香、一同之に次ぎ、弟君の挨拶ありて昼餉す。この会最も莊重を極めて苟も乱れず、人々襟を正して偏に居士の清懷に接す。食後一団となりて各々居士の懷旧談に時を移す。某氏の死去前日の模様談、雲峰教頭の居士が昆虫採集談、弟君の居士の宗教觀其他、みづほのや氏の居士の俳風に就て、四沢氏の雅号に就て、其他各懷旧を叙して尽くるなし。この日梅塘氏の電報にて句を寄するの外十教氏の弔信あり。

拈華

五月雨の宿に泣き臥す計音哉

一露

悲しさや夏朝顔の枯れつくす

血涙

青嵐病床の燈火吹き消しぬ

頼風

神の子となりて遊ばん雲の峯

梅塘

五月雨るゝ六月二十五日哉

梅里

空蟬の世を憂と螢消えにけん

東街

散る芥子に雨ひく糸のよもすがら

居士の旧居に参じて

栗咲てこの愁更に新なり

木外

なおこの追悼会席上において、三川懷徳碑建立の話がまとまる。また三川の忌日を五月雨忌と称すことも決まる。

○七月一日、長野市卯の花園に於て、北信地方の日本俳人の三川居士追悼会が開かれる。同八日付、長野新聞紙上に、当日の追悼句が出される。参会者を記す。菊丸、一村、鷺仙、三松、梅塘、一露、西友、羽白、風花、一桜、白狐子、文生、解垢、九万字、啞子、春畦、露香。

○七月一日発行の「ホトトギス」第二〇巻一〇号「消息」に、六月二七日記として、虚子の三川追悼文が出る。³⁾

○七月二日、「信濃民報」紙上にも「三川先生追悼」と題した前月三〇日の追悼会記事が載る。執筆は四沢。

○七月五日、東筑摩郡島内尋常高等小学校で、上原前校長の弔魂式が行われ、終った後、高等科全生徒が墓参をする。

○七月十五日、「昆虫世界」一一九号、雑報欄に、三川逝去の記事が載る。⁴⁾

○一二月、三川懷徳碑建碑趣意書が頒布される。

○四〇年はじめから死去するまでの発表句数は、七七句。発表あるいは収録機関は、「長野新聞」、「昆虫世界」。

(1) 三川の死去の報を、上原寅太郎、望月光男、堀内卓造などからの手紙で知った長塚節は同年六月二八日、望月光男宛の書簡にこう記して

いる。「上原三川先生突然御逝去の由御報に接し、只管おどろき入申候。先頃の模様にては今頃左様のことも候まじくと存じ居候に、人の命殊に長病人の命は測られぬものと恐ろしく相成申候。今に相成候ては小生は以ての外の罪人に相成謝罪致し候とて、追ひつき申さぬ事に至り申候。」とある。そしてさらに、光男、卓造と三川先生の厚意に報いるため節の母親が「手にてありたる茶を少しばかり呈上致したき」、三川の霊前に捧げてほしいとの記事がある。

(2) 「私の訃音に接したのは、其午後三時頃であった。遺骸は其夜和田村の墓場に仮埋葬を行ったのであるが、当時農繁季節でもあったので、島内、和田兩村の知己へは勿論、一般へも埋葬後に喪を発表したのであった。梅雨晴の夜の葬送に、遺骸に随ふ者兩三人、其兩三人の中の一人であった私も途中で見送ったのみであった。其足で友人の家二軒を叩き起して訃を報じた頃は、短夜の空は白々と明けて、葭切の音が頻に雨を喚んで居た。此の寂しい印象は尚未だ昨日の如くであるのに、三十三回忌は明年に迫って居るのである。」(平瀬泣崖、三川句集の出版(松本時論、昭和十三年(一九三八)一〇月二五日)。平瀬泣崖(胡桃沢四沢)が後年、記した三川逝去の日の様子である。

(3) 高浜虚子の三川追悼文を記すと次の通り。

上原三川君の訃音に接す。故直野碧玲瓏、中村楽天の二君と共に「新俳句」編纂の勞を頒ち、爾來宿痾を養ひつゝ故郷信州松本に在りて育英の事に従ひ、近來病漸く重く職を辞して閑地に就きつゝありしが、六月廿五日終に易簀されたる由、松本松声会胡桃沢勲内氏よりの報知に接し候。小生三年前信州諏訪に遊びたる帰途汽車にて松本を過ぎり、車中奇峯君に、あの川に面したる白き障子の一間こそ三川君の居室なれと教はりたる事あり、氏が貧を守りて漫に世と相容れざりしと聞く晩年の高風は二枚の白き障子として深く／＼小生の脳裡に印象され、今も瞑目すれば其白き障子を中心にして島内村の風光画図の如く目に浮び申候。初めて神田淡路町高田屋の一間に小生を訪はれし時の病人らしき相貌と、

此島内村の白き障子とを結びつけて我上原三川君は長へに天の一方に在り。前号所載「鉄砲百合大きく鉢に開きけり」とふ句今は故人を思ふの料となり終んぬ。悲哉。

百合の句の上手にあらぬ貴とさよ

明治四十年六月廿七日虚子記

(4) 「三川、上原良三郎氏、客月五日病を以て逝く。氏昆虫学に於ける造次浅からず、本誌文学欄創設以来、俳句の選者として大いに助力せられたるに今や亡し、嘆て吊す。」(昆虫世界一一九号)

明治四一年(一九〇八)

○一月一日、「馬酔木」(第四卷第三号)に三川遺稿短歌「曾遊をおもひ出でよめる」三四首が載る。前書に伊藤左千夫の三川への追悼文が出ており、三川小論のおもむきがあるので、次に記す。

「明治四十年六月二十五日信濃の高士上原三川子逝く。三川子は明治新俳壇の初期に於て最も賛助の功ありし人なり。久しく病を養ふて松本なる浅間の湯にありしを、遂に永眠の計を伝ふ。三川子身を処すること清く、高風超然として時流を抜けり。去年松本に遊び子を一度相見て、深く故旧の感を抱く。爾来消息相通ずと雖も、再び相見るの機を得ずして、永く幽明を別てり。近頃松本諸同人其遺稿を寄せらる。短歌三四首皆明治三十九年の作にかか。今其歌風を見るに着想自然にして格調平淡、甚だ故子規子の歌に近し。清瘦淡懷直に三川其人を見るの思あり。予深く三川子の俳句を知らず、而して今其の短歌を見る。予をして三川子は俳

人にあらずして寧ろ歌人たるの感あらしむ。由来俳人にして歌を作らんとするものなきにあらざるも、能く作り得たるもの少し。

予は三川子の成功に驚き、且意外なる新歌人一人得たるを悦ぶ。」

○秋、三川懷德碑の碑材を精磨する。山辺石高二尺八寸、巾二尺一寸六分、厚さ七寸。

大正元年(一九一二)

○一二月一五日、三川上原先生懷德碑、東筑摩郡島内村島内小学校畔に建立除幕式が行われる。これより先、明治四二年(一九〇九)三月、内藤鳴雪により碑文原文が作られ、翌年三月までに桂湖村により撰文が完成。伊藤左千夫が撰文揮毫のため奔走し、中村不折の筆になり四五年(一九一二)二月になる。三月、石工大槻勇太郎彫刻に着手し、九月に刻り上がる。一二月三日建立に着手。碑文は掲載写真参照。

昭和一三年(一九三八)

○一〇月五日、三川上原良三郎先生懷德会(発行所、松本市萩町大成堂書店内)から『三川句集』が発刊される。編輯者胡桃沢勘内。四六判二〇八頁、箱入四〇〇部限定本、頒布会費二円二〇錢。口絵は明治三〇年四月帰郷に際し河東碧梧桐と記念に撮った一葉並びに明治三八年「畑打」十句集出句稿と短冊「蜻蛉のとまらぬ杭はなかり鳧」(明治三九年一二月二一日長野新聞選句欄

選者吟)のスナップ。収録総句数一〇五六句、春二〇一句、夏三二四句、秋二七二句、冬二二一句、新年四八句、短歌三四首。矢ヶ崎奇峰序、胡桃沢勘内編纂後記が付いている。

昭和十四年(一九三九)

○七月、三川三三回忌法会にかねて、『三川句集』出版記念および自筆烟打十句青銅懸額奉納式が、東筑摩郡和田村の菩提寺万年寺で行われる。懸額は香取秀真鑄造によるもの。

昭和三十三年(一九五八)

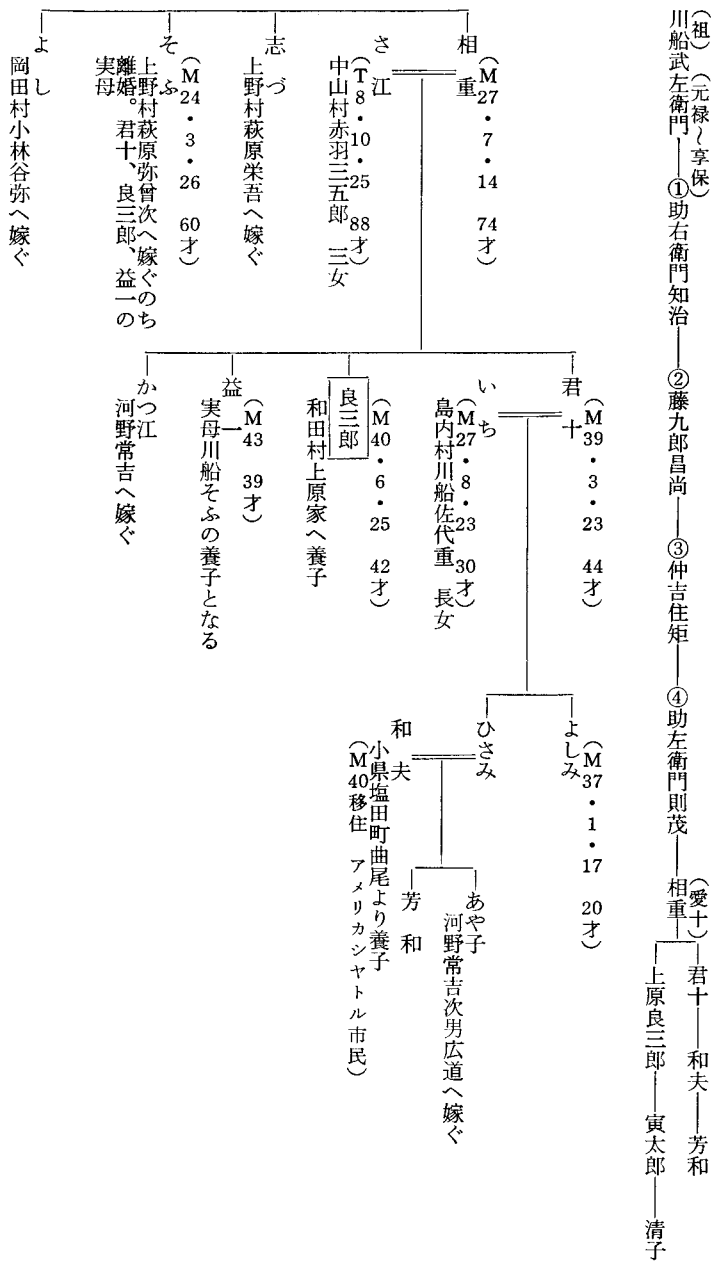
○四月、自筆烟打十句青銅懸額を石に嵌めた句碑が万年寺境内に建立される。

昭和五十一年(一九七六)

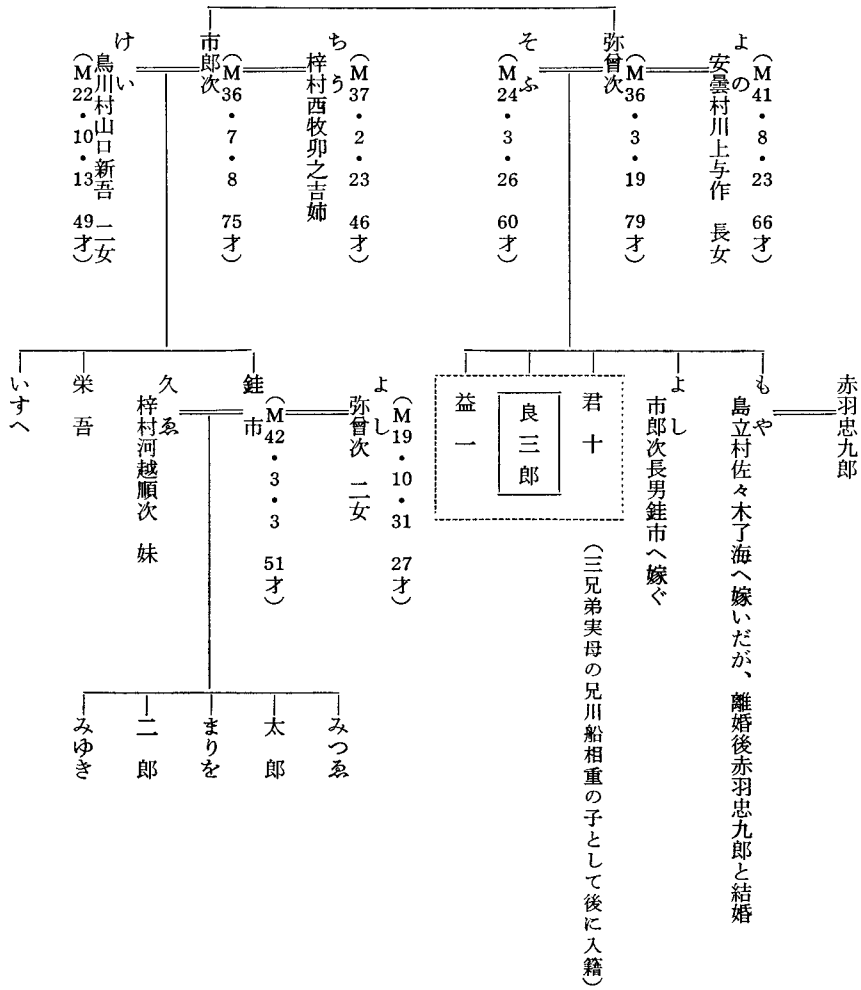
○二月一日、三川句碑、「五月雨や山の温泉のさゝ濁り」が浅間温泉神宮寺境内に建立される。⁽¹⁾

(1) 句碑建立のいきさつを神宮寺住職山本雷峰が句碑の裏に次のように記している。「上原三川は子規門下の高弟にして清瘦淡懷の士と伝へ聞く 居士没して七十年の浅間温泉その終焉の地なり かつて三川に師事せる二三の有志により句碑建立の議ありたるも果さず その人々も今は亡し たまたま三川の遺墨を西石川旅館に所蔵せらることを聞き乞うて拡大して刻みて三川の風韻を永く留めんとす 幸に百瀬嘉郎、鈴木千鶴子氏等の協力資助を得たることを多とす 五十一年春日 雷峰老納記」

川 船 家



萩原家



『子規全集・別巻三』、回想の子規附補遺』句会稿補遺、講談社刊、昭和53年3月18日 含、月次十句集

『上原三川俳句集』(編年体)

宮坂敏夫編、信州大学医療技術短期大学部紀要第六巻第一号「上原三川(六)——日本俳句運動の地方への伝播の状況VI」所収、昭和56年3月

◇参考文献

『辞典』(上原三川の項担当者)

『俳諧人名辞典』、高木蒼梧、巖南堂刊、昭和35年6月1日

『長野県百科事典』、藤岡筑郎、信濃毎日新聞社刊、昭和49年1月20日

『現代俳句辞典』(「俳句」第26巻第10号臨時増刊号)、宮坂静生、角川書店刊、昭和52年9月15日

『俳句辞典近代』、松井利彦、桜楓社刊、昭和52年11月15日

『日本近代文学大事典』第一巻人名、瓜生鉄一、講談社刊、昭和52年11月18日

『現代俳句大辞典』、奥村貞正、明治書院刊、昭和55年9月20日

『現代俳句の基礎知識2』(「俳句」第30巻第9号)、日本派、宮坂静生、角川書店刊、昭和56年9月1日

『三川論および周辺資料』

「来るべき俳壇」(上・中・下)、矢ヶ崎奇峰、長野新聞、明治36年1月10、11、12日、『奇峰文集』(昭和7年2月15日刊)所収。『子規全集別巻二』、回想の子規一』(講談社刊、昭和50年9月18日)所収。

「三川先生」、胡桃沢四沢、松本中学校校友第25号、明治41年

『木外遺業』、木外居士慰霊会編輯、明治45年2月15日

『銅山遺稿』、深沢白人編輯、泰平館書店刊。大正3年6月15日

「上原三川のことども」、矢ヶ崎奇峰、信濃教育第495号、昭和3年1月

「上原三川先生のこと」、胡桃沢勘内、信濃教育第495号、昭和3年1月

「枕山子を哀しむ」、平瀬泣崖、松本時論、昭和7年5月15日

「憶、三川先生」、平瀬泣崖、松本時論、昭和9年6月15日

「二十五年」、四沢山人、松本時論、昭和9年9月5日

『碧玲瓏』、桂井未翁編、金沢北声会刊、昭和9年9月10日、百部限定出版

「三川上原良三郎先生略歴稿」(活版印刷9頁)並びに「三川先生伝追補

録」(筆記稿六枚)、胡桃沢勘内、昭和10年1月10日

「枕山遺話二つ」、平瀬泣崖、松本時論、昭和10年2月15日

「上原良三郎先生」、胡桃沢勘内、信濃教育会刊、昭和10年6月10日、『教育功勞者列伝』所収

「四沢先生の昔話聞書」(七)、住山久二、松本時論、昭和11年7月15日

「子規三十五回忌」、平瀬泣崖、松本時論、昭和11年9月15日

「三川句集の事など」、四沢散人、松本時論、昭和12年9月25日

「三川句集を校正しつつ」、胡桃沢勘内、未発表稿(原稿用紙四〇〇字詰23枚)、昭和13年か

「三川句集の出版」、平瀬泣崖、松本時論、昭和13年10月25日

「玉池草堂雜記」、平瀬泣崖、松本時論、昭和14年6月25日

『明治俳句史論』、太田鴻村、交蘭社刊、昭和14年8月7日、第一編明治俳句の発生時代、新俳句時代の項

『信濃の俳人』、小林郊人、木村書店刊、昭和19年5月15日、正岡子規と信濃の俳人、三川、奇峰、奇遇、木外ほかの項

「上原三川のこと」(講演草稿8枚)、上原寅太郎、昭和22年6月29日

「新俳句」の成立と特色、松岡満夫、国語と国文学第34号、昭和27年8月

「近代俳句作家素描上原三川」、柳生四郎、睡蓮、昭和41年11月

『三川先生の思ひ出』(謄写印刷21頁)、岩崎睦夫編。目次「俳人上原三川を偲ぶ」(昭和22年6月25日三川四十回忌にNHK松本放送局より放送したもの)・野村信次郎、「三川先生の思ひ出」・小原伝利、「編纂後記」・胡桃沢勘内、上原三川略年譜

『島内小学校の沿革』、代表島内小学校校長武井一衛、島内小学校刊、昭和45年3月10日

「島内人物誌(1)―主として文人について―」、川船秀人、松本市公民館報島内版第136号、昭和45年5月30日

『子規とその門の人々』(文芸写真集)、池上喜作編、角川書店刊、昭和45年11月30日、「子規文学運動の地方化」(松井利彦)を収録

「島内人物誌(2)」、(望月直弥)、川船秀人、松本市公民館報島内版第157・159・160・161号、昭和48年11月30日、昭和49年7月30日

「上原三川」(『信濃路の俳人たち』所収)、藤岡筑郎、信濃毎日新聞社刊、昭和50年11月20日

「俳句革新の先駆上原三川」、宮坂静生、信州の旅51年冬、昭和51年1月1日

「上原三川(一)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅰ―」、一、日本俳句との出会い、二、月次十句集における三川、三、「新俳句」編輯の内情、四、旧派との論争、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第一号、昭和51年3月

「俳人三川、こころと足跡」(一)〃〃、宮坂敏夫、信濃毎日新聞朝刊、昭和51年7月1日、7月14日、内容①「人となり」、②「島内時代上」、③「島内時代下」、④「『新俳句』編さん」、⑤「昆虫俳句」、⑥「古池論争」⑦「糸瓜忌論争」、⑧「秀句」

「教育者としての三川上原良三郎」、宮坂敏夫、信濃教育第33号、昭和51年7月

「上原三川論―日本俳句の草分け」、上原三川と二つの論争―日本俳句運動の信州への伝播の状況」(『夢の像―俳人論』所収)、宮坂静生、高文堂出版社刊、昭和51年9月25日

「上原三川(二)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅱ」(五、教育者としての一面)、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第二号、昭和52年3月

「上原三川と子規―昆虫俳句をめぐる一考察」、宮坂静生、俳文芸第9号、昭和52年6月25日

「秋風の浅間のやどり―三川と左千夫」、宮坂静生、信州の旅53年冬、昭和53年1月1日

「上原三川(三)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅲ」(六、新題昆虫俳句)、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第三号、昭和53年3月

「ささ濁り―上原三川と浅間温泉」、宮坂静生、文学散歩だより第6号、松本市立図書館内松本文学散歩の会、昭和53年3月31日

『明治俳壇史』、村山古郷、角川書店刊、昭和53年9月25日

「上原三川(四)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅳ」(七、松声会小史、八、信濃十句集)、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第四卷第一号、昭和54年3月

「上原三川の秀句」、「秋風の浅間のやどり」(『俳句の出発―子規と虚子のあいだ』所収)、宮坂静生、高文堂出版社刊、昭和54年4月1日

「俳句革新運動のリーダー上原三川」(松本平の近代人物誌31)、山田貞光、中日新聞松本ホームサービス、昭和54年4月19日

「上原三川(五)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅴ」(九、糸瓜忌論争)、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第五卷第一号、昭和55年3月

「三つの労作について」(『上原三川』『大須賀乙字の俳句』『千家元麿句集』)、村山古郷、東京新聞(中日新聞)俳句月評、昭和56年4月26日

「上原三川(六)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅵ」(十、三川俳句論―編年体三川句集)、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第六卷第一号、昭和56年3月

「上原三川(七)―日本俳句運動の地方への伝播の状況Ⅶ」(十一、三川年譜考)、宮坂敏夫、信州大学医療技術短期大学部紀要第七卷第一号、昭和57年3月

(一九八一年一〇月三十一日 受付)